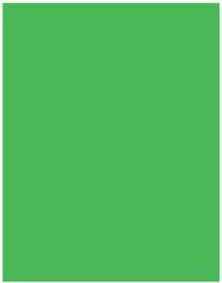




企業・団体による  
パラスポーツ振興の取組事例集



TEAM BEYOND COMPANY REPORT



# はじめに

東京都は、パラスポーツ(パラリンピック競技に限らず広く障害者スポーツを表す言葉として使用)の裾野が拡大し、社会に根付き、障害の有無や性別、年齢などを問わず、全ての人がスポーツを楽しむことができる「スポーツを通じた共生社会の実現」を目指して、様々な取組を進めています。

2016年から始まったパラスポーツ応援プロジェクト「TEAM BEYOND」では、アスリートも、観る人も、支える人も、みんなが一つのチームとなってパラスポーツを盛り上げていくこととしており、2018年からは、社会の中核を担う企業・団体による取組によって、パラスポーツが社会に根付くことを目標としたセミナー・交流会やワークショップなど、様々な事業を展開してまいりました。

これらの取組を通じ、多くの企業・団体が「関心はあるが、どのように関わればよいのか(何から始めればよいのか)分からない」「取組を行うことで企業にどのような効果(メリット)があるのか分からない」といった疑問を抱えていることが分かりました。

そこで、この度、企業・団体が取組を始めるきっかけづくりや、より一層の後押しを行うことを目的として、「TEAM BEYOND 企業・団体によるパラスポーツ振興の取組事例集」を発行いたします。

本事例集では、20に及ぶ企業・団体に取材を行い、パラスポーツ振興に向けた、それぞれの取組を「観戦会、体験会・講習会、ボランティア、協賛、アスリート雇用、技術支援・製品開発、施設貸出」といった様々な角度から紹介するなど、どのような関わり方ができるのか、方向性のヒントが得られる構成としています。

また、取材を通じて新たに分かったことがあります。それは、どの企業・団体も組織としての明確な「理念」があり、その理念をパラスポーツ振興という形で体現していることです。社会貢献はもとより、パラスポーツを活用した社内コミュニケーションの活性化など、組織の中にも好循環をもたらしている企業・団体が数多く見られました。

本事例集がパラスポーツ振興の取組を検討されている皆様の一助となれば幸いです。

末筆ながら、本事例集の作成に当たって、取材及び事例を紹介させていただくことに快く御協力いただいた企業・団体の皆様にお礼申し上げます。

2021年2月  
東京都オリンピック・パラリンピック準備局



## 目次

はじめに(冊子の目的)	1
目次	2
TEAM BEYONDの紹介	3
支援方法	4
企業・団体の取組事例	
株式会社 RDS	5
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	7
株式会社オーエックスエンジニアリング	9
近畿日本ツーリストグループ	11
錦城護謨株式会社	13
株式会社セレスポ	15
中外製薬株式会社	17
株式会社つなひろワールド	19
公益財団法人鉄道弘済会 義肢装具サポートセンター	21
東京ガス株式会社	23
日本電気株式会社	25
NTT(日本電信電話株式会社)	27
日本工学院八王子専門学校	29
日本航空株式会社	31
日本生命保険相互会社	33
株式会社乃村工藝社	35
野村ホールディングス株式会社	37
株式会社ブリヂストン	39
三井住友海上火災保険株式会社	41
三菱商事太陽株式会社	43
TEAM BEYONDのメンバーになると	45
TEAM BEYONDのメンバーになるには	46

※本冊子に掲載している各企業・団体の取組事例の詳細は、下記のページでご覧になることができます。  
<https://www.para-sports.tokyo/enterprise/voice/>



## TEAM BEYONDとは

「TEAM BEYOND」は、パラスポーツを応援するを増やす東京都のプロジェクトです。誰もがいきいきと生活できる、活躍できる、多様性を持った都市「ダイバーシティ」。「TEAM BEYOND」は、この「ダイバーシティ」を実現していくことを目標に、様々な視点からパラスポーツの魅力を発信していきます。

## 『パラスポーツで会社を変える』 ～パラスポーツと共に歩もう～

パラスポーツに興味はあるけれど、企業としてどのように関わればよいのか分からない。企業にとってどんなメリットがあるの？こうした疑問の解消に向けて、参考となる企業の取組事例やパラスポーツの支援方法などを紹介しています。これならできる！やってみよう！を見つけられる場にしていきます。パラスポーツをきっかけに、共生社会を一緒につくっていきましょう！

## 支援方法

企業・団体の様々な取組・支援内容をジャンル別に紹介しています。どのような関わり方ができるのか、方向性のヒントが得られます。

1



### 観戦会

まずは、行って、観て、体感してみよう！

組織としてパラスポーツを観戦・応援することで社員同士の絆を深め、社員のパラスポーツへの興味を喚起するとともに、ダイバーシティの推進につなげます。



2



### 体験会・講習会

社内の研修やレクリエーションで取り入れられるかな？

パラスポーツ体験会や講習会を通して、社内でのパラスポーツ振興や理解啓発につなげます。



3



### ボランティア

どのような関わり方があるんだろう？

競技団体主催の大会やイベント運営への協力等により、競技やアスリートとの関わりや、地域との交流のきっかけが生まれます。



4



### 協賛

協賛のメリットを考えよう！

競技団体や大会への協賛により、競技団体運営の強化や選手の競技力向上、パラスポーツの普及啓発につなげます。



5



### アスリート雇用

一緒に働く方法を考えよう！

アスリートの競技活動と職業生活のキャリア支援や、雇用したアスリートが出場する大会に社員が応援に行くなどで、社員の団結力の向上を図るとともにパラスポーツをより身近なものとしします。



6



### 技術支援・製品開発

自社のサービスと結びつくことを見つけよう！

企業・団体が持つ独自の技術を活用した競技用具の開発など、パラスポーツの振興に役立つ技術(サービス)を提供することで、競技力向上や大会運営等の効率化につなげます。



7



### 施設貸出

あの施設が活用できるかも・・・？

企業・団体が保有する体育施設などを活動場所として競技団体、選手、パラスポーツを実施するクラブなどに貸し出すことで、競技力向上・パラスポーツの普及につなげます。



# パラスポーツの用具開発はCSRではなくCSV 多方面からのコミュニケーションで魅力を発信

先端産業で培った確かな技術力とデザイン力をベースに、パラスポーツ用具の技術開発も行うRDS。トップパラアスリートとの妥協なき共同開発を通じて培った技術を一般向けプロダクトにも応用する取り組みをスタートさせる。また、より広く情報を届けるための多角的なコミュニケーションも実践している。



## 株式会社 RDS



体験会・講習会



協賛



アスリート雇用



技術支援・  
製品開発

### 企業情報

#### 株式会社 RDS

【所属人数】30名  
【住所】東京都渋谷区千駄ヶ谷3-8-6  
(東京デザインオフィス)  
埼玉県大里郡寄居町  
赤浜1860(開発スタジオ)  
【電話】048-582-3911  
【URL】<http://www.rds-design.jp/>



#### HEROX

本文内にも紹介があった株式会社RDSが運営するWEBメディア。杉原社長が編集長を務め、各職者との対談やスポーツ特集など、メディカル・テクノロジー・スポーツという3つの柱を軸に、多彩な切り口で発信している。  
【URL】<http://hero-x.jp>  
【運営】株式会社RDS



## 自社の強みを活かしたパラスポーツとの関わり



ドライカーボン松葉杖

自動車やロボット、宇宙航空といった先端産業で開発を行う同社。2013年にグッドデザイン金賞/経済産業大臣賞を受賞した「ドライカーボン松葉杖」をきっかけに、福祉やパラスポーツ分野にも進出。

車いす陸上アスリートの伊藤智也選手を開発ドライバーに迎えて、車いすレーサー(陸上競技用車いす)の開発に乗り出した。また、シーティングポジションの最適化を計測するシミュレーター「RDS SS01」も千葉工業大

学 未来ロボット技術研究センター fuRo と共同開発。2019年9月には車いすレーサー「RDS WF01TR」の販売をするなど、自社の強みを活かしてパラスポーツに深く関わっている。



(左)伊藤選手(パラ陸上) (右)杉原社長

「チェアスキーや車いす陸上のように用具が大きなウェイトを占める競技にとって、大会は、選手と用具開発企業が手をとり合って挑む大舞台であり、パラアスリートは大切な開発パートナーです。」と、同社の杉原行里(あんり)代表取締役社長は語る。

大会で培ったテクノロジーを応用し、  
自社の利益につなげる



「そもそも当社にとって、車いすレーサーやシミュレーターの開発は、CSRではなく、CSV(Creating Shared Value: 共有価値の創造)という位置づけです。F1レースで培われた最先端テクノロジーの数々は、市販車などに転用されています。これと同じように、大会で得た知識や技術を一般社会向けのプロダクトに応用し、きちんと利益につなげていくつもりです。」(杉原社長)

例えば、シミュレーター「RDS SS01」は、競技用及び一般向け車いす用にはもちろんのこと、高齢者やオフィスワーカー用のいすなど、長時間座る人向けのプロダクトへの応用を視野に入れている。



未来型モビリティとして作られた「RDS WF01」

また、同社は、車いす自体の概念を変えようとしている。一般向けに開発した車いす「RDS WF01」は、「いつか乗ってみたい車いす」をコンセプトに、“かっこよさ”を重視した未来型モビリティとして作られている。

## コミュニケーションは多角的に

「パラスポーツって面白いと体感したり、自分に少しでも関係していると思えば、見方が変わるのではないのでしょうか。そして、そう思ってもらうためには、一方的なコミュニケーションには限界があり、多角的なコミュニケーションが必要だと思います。」(杉原社長)



車いすレーサーを体感できる「CYBER WHEEL X」

同社の車いすレーサーについては、同社所有のWEBメディア「HERO X」を通じて、開発の様子やプロダクトの特徴はもちろん、競技自体の魅力や車いす陸上アスリートのすごさなど多彩な切り口で発信し続けている。さらに、ゲーム感覚で車いすレーサーを体感できるVR型のエクストリームeスポーツ「CYBER WHEEL X」を株式会社ワントゥーテンと共同開発。別の角度からのアプローチも仕掛けた。「最初は小さなスタートでも、多くの人が勇気を持って決断し進むことで、どんどん大きくなっていく。もちろん、そこに共鳴する人もいれば反発する人もいるでしょう。でも、これと思ったら、どんどん行動するべきです。当社ではいま、2020年に向けて複数のプロジェクトを進めています。僕らの取り組みを通じて、多くの人が自分ごと化してもらえたらと思います。」(杉原社長)

## コロナ禍における取組・今後の方向性

イタリアで開催された世界最高峰の国際デザインコンペティション「A' Design Award & Competition 2020」で、「RDS WF01」「RDS WF01TR」「RDS SS01」のエントリー全プロダクトが入賞し、「RDS WF01」はカテゴリー最優秀賞となるプラチナを獲得。これからも障害をもった方だけでなく、誰もが「いつか乗ってみたい」と思うモビリティを世に送り出していきたい。

# 「ハートにコストはかからない」 地域密着の活動で、全国に 心のバリアフリーの輪を広げる

5年連続で東京都スポーツ推進モデル企業に選ばれ、「殿堂入り」となったあいおいニッセイ同和損害保険株式会社。15名のパラアスリートを含む計22名(2020年8月現在)の所属アスリートをスポーツ体験や講演会の講師として派遣し、地域に貢献。また、パラスポーツ支援を長く続けるために、コストを抑える工夫も行っている。



## あいおいニッセイ同和 損害保険株式会社

あいおいニッセイ同和損保  
MS&AD INSURANCE GROUP



観戦会



体験会・講習会



ボランティア



協賛



アスリート雇用



施設貸出

### 企業情報

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

【担当部署】経営企画部

【所属人数】4名

【住所】東京都渋谷区恵比寿1丁目28番1号

【電話】03-5789-6308(直通)

【URL】<https://www.challenge-support.com/>



選手の活動状況に応じ、全国の職場に配属されている。このような取組を知り、北海道小樽市のスポーツをしている障害を持った中学生が修学旅行で同社を訪問し、視覚障害者柔道の石橋元気選手と交流を深めた。



小樽市の中学生と同社パラアスリートとの交流の様子

### 自治体と企業をつなげ、支援の輪を広げる

同社は、「地域密着」を行動指針の一つとしており、全国の地方自治体とともにさまざまな活動を展開してきた。障がい者スポーツ支援を通じた共生社会の実現を目指した活動にも力を入れ、東京都ワイドコロラボ協定も締結している。例えば、渋谷区とは、2017年にS-SAP(シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー)協定を締結。「渋谷区でご活用いただくため、ポッチャ用具を寄贈しました。さらに、パラスポーツ支援の輪も広げたいと考え、当社の食堂スペースを利用してポッチャの体験会を行い、長谷部健区長はじめ渋谷区関連部署の皆さま、S-SAP協定締結企業や、ユニバーサルマナー研修などを手がける企業にも参加いただきました。皆さん楽しんでくださいましたし、何より和気あいあいとした雰囲気の中、渋谷区や企業同士が交流できて良かったと思います。」と倉田次長は振り返る。地方公共団体と連携した活動は、全国で年間80回を数えるほどに成長した。

### コストをかけないから、続けられる

同社では、一貫して大切にしていることがある。それは「コストをかけないこと」である。「少しでも長く続けるには、できるだけコストを抑えなが

らコツコツと活動することが必要です。スポーツにはともすれば莫大な予算を投じがちですが、それでは万が一の際、真っ先に予算を切られてしまう恐れがある。それを避けるためでもありますし、SDGsの目標にある持続可能性の追求にも関連します。」(倉田次長)



同社所属パラアスリートを社員で応援

「パラスポーツ支援をしたいと思っても、経営の上層部の説得に苦勞するケースがあると耳にする機会がありますが、基本的には、障がい者支援やパラスポーツの機運醸成にNOという経営者はいないのではないのでしょうか。もし、難色を示される場合は、負担増を気にされている可能性があります。でも、ハードはコストがかかりますが、ハートにコストはかかりません。」(倉田次長) そうはいつても、やはり自社で取り組むにはハードルが高いという企業・団体には、まずTEAM BEYONDに参加してはと、倉田次長は提案する。「TEAM BEYONDのワークショップや大会観戦に参加すると、人脈や情報、そして気づきが得られます。参加したら自社に持ち帰って何かをしなくては、などと難しく考える必要もないと思います。TEAM BEYONDに参加するだけで立派なパラスポーツ支援活動になるのですから。」(倉田次長)

### コロナ禍における取組・今後の方向性

コロナ禍でも今できうる取組を継続している。今年度3名のアスリートを採用、職場社員が総出で感染対策を行い、手づくり入社式を行った。緊急事態宣言下の5月1日より2ヶ月間、社内報webサイトや公式facebookにて所属アスリートによる「応援バトンリレー」投稿を展開した。テレワークと練習の工夫を通じて「自分たちにできることは何か」を考える意識が高まった。今後もスポーツの明るい取組が社員の元気を引き出す一助になればと考えている。

### 社員が応援したくなるアスリートを雇用



同社のアスリートと社員の皆さん  
(アジア大会・アジアパラ大会社行会にて)

「パラスポーツ支援を通じて、障がいのある方の自立支援を」との考えのもと、2014年よりパラスポーツ支援を開始した同社。まずはパラスポーツ観戦からと、初年度はジャパンパラ競技大会の全競技を観戦、現在では年間約20大会に拡大されている。海外では、2019年より同社の現地法人による応援活動も開始した。また、都道府県主催の障がい者スポーツ大会での運営ボランティア活動も各地域で行っている。

「パラスポーツって、観るとどれも迫力があって面白い。でも当社の社員たちがもっと、心から応援するためには、思い入れを持って応援できる対象が必要なのだと気づきました。そこで、自然と応援したくなるアスリートを雇用しようと思い立ちました。アスリート雇用はスポーツ支援そのものだと思います。」と、経営企画部スポーツチームの倉田秀道次長は語る。



倉田次長

「制度設計をするにあたり、採用方針を二つ決めました。一つは、競技引退後も継続して雇用すること。そしてもう一つは、競技の種類やレベルにこだわらず、人物重視の採用をすることです。」(倉田次長)

2020年8月現在、15名のパラ選手が在籍しており、各

# 世界のトップアスリートが信頼を置く競技用車いす 手に入りやすくすることで、車いすスポーツの 普及を目指す

競技用車いすを手がけるオーエックスエンジニアリング。創業者が車いす生活となったことをきっかけに、オートバイ販売店から車いす事業へと転換。競技に関わる喜びとやりがいを感じ、競技用車いすを開発、数々のメダル獲得に貢献している。競技レベルに関係なく、一人ひとりの選手にとってのベストな競技用車いすを提供すべく努力を重ねている。



## 株式会社オーエックスエンジニアリング



### オートバイから車いすへ、事業を転換



競技用車いすと向き合う

同社がオートバイ販売から車いす事業に転換したのは、創立者である故・石井重行が1984年に新型車の試乗中に事故で脊髄損傷を負い、車いす生活となったのがきっかけである。乗り物好きのアクティブ派らしく自分にぴったりの車いすを求めて次々と乗り換えていった。しかし、デザイン面でも機能面でも、なかなかこれとい



観戦会



体験会・講習会



ボランティア



協賛



技術支援・  
製品開発

### 企業情報

株式会社オーエックスエンジニアリング

【住所】千葉県千葉市若葉区中田町2186-1

【電話】043-228-0777(代表)

【URL】<http://www.oxgroup.co.jp/>



### 競技用車いすに取り組み、数々の メダル獲得に貢献

同社は車いす業界全体から見れば、後発なので、最初からターゲットを絞り、乗りたくなる、出かけたくなる車いすを目指し、オーダーメイドで提供することとした。機能やデザインにもこだわった。

また、これと同時に競技用車いすを手掛けることも決めた。



選手からのフィードバックを聞く

当時、パラスポーツについての知識は皆無だったが、パラスポーツ界のレジェンド、星義輝氏らの依頼を受けて、4輪型のテニス車の開発に着手。同時に、形が似ているバスケットボール車の開発にも着手した。

1994年からは陸上用車いす(レーサー)の開発にも乗り出し、短距離ランナーの畝(うね)康弘選手を社員に迎え入れて開発。畝選手は、1996年に陸上男子200m(T52)にて、世界新記録で金メダルを獲得。当時、米国製レーサーが主流だった陸上界において、初めて日本車が金メダルを獲得することにより、同社の名を広く知らしめることとなった。

以後、同社はサポート契約を結んだ国内外の選手たちに競技用車いすを提供。

「選手の皆さんに当社の車いすを使っていただき、その使用感や世界の動向をフィードバックしていただく。それを反映してまた次の開発に活かす。この繰り返しで現在につながっていますし、多くの選手が活躍していただくことで、当社の製品を知っていただく機会も増えていくと思います。」と、広報室の櫻田太郎氏は語る。

### 車いすスポーツをもっと多くの方に 楽しんでいただくために

同社の競技用車いすの特徴の一つは、トップアスリート用もパラスポーツ愛好家用も同じ材料、同じ製造工程で作られていることにある。

多くの選手に使用いただけるよう、設計を工夫し価格を抑える努力をしている。そこには、車いすスポーツをもっと盛り上げたいという想いが込められている。



櫻田氏

近年、たしかにパラスポーツは注目されるようになったが、もっとスポーツを始める車いすユーザーが増えて欲しいと考えている。次世代の育成も重要であることから、同社では、子どもたちがもっと気軽にスポーツや遊びを楽しめるようにと、楽に動けて、ターンもしやすいキッズモデルも発売。

さらに、同社ではバドミントン用の車いすも開発、同種目の2選手を含む34選手をサポートしている。同社の技術が詰まった競技用車いすを選手たちがどのように操作し戦っているか、今後、観戦をする際には、そんなところに注目してみるのも面白いかもしれない。

### コロナ禍における取組・今後の方向性

コロナ禍においてもアスリートは新たな取組や改善を行っている。社としてもアスリートが抱えている課題や要望に迅速に対応するとともに、競技力向上につながる研究開発を継続していく。また、各地のパラスポーツ体験会などへ車いすの貸出を行い、パラスポーツの理解啓発にも協力していく。

# 誰もが旅もスポーツも楽しめる社会へ パラスポーツを通じてユニバーサル ツーリズムの文化を醸成

選手の移動、宿泊、食事……。スポーツイベントの裏側には、必要なことがたくさんある。近畿日本ツーリストグループは旅行業という立場から、様々なパラスポーツをサポートすることで、ユニバーサルツーリズムの普及にも力を入れている。



世界最大級の旅の祭典「ツーリズムEXPO ジャパン」にて

## 近畿日本ツーリストグループ



体験会・講習会



協賛



技術支援・  
製品開発

### 企業情報

#### 近畿日本ツーリストグループ

【担当部署】スポーツ事業推進部 総務広報部(広報)

【所属人数】スポーツ事業推進部18名

総務広報部(広報)6名

【住所】東京都新宿区西新宿2-6-1(新宿住友ビル40F)

【電話】03-6863-0048

【URL】<https://www.knt.co.jp/>



### 旅を通じてパラスポーツをサポートする

「これまで当社は2018年の平昌冬季パラリンピックにて日本代表選手団の輸送をサポートするなど、その経験を活かして様々なスポーツやイベントの運営に携わってきました。今後も、“旅”や“移動”の面で大会やパラアスリートをサポートしていきます。」と、語るのはスポーツ事業推進部の村澤雅弘課長。



村澤課長

これは当社が推進してきた「ユニバーサルツーリズム」への取組の一環でもある。当社では、誰もが旅行を楽しめ

る社会の実現を目指してきた。

例えば、プロのドライバーが講師となり、サーキット場で乗用車を運転する視覚障がいのある方向けのツアー、車いすのまま乗れる人力車を使ったツアーなど、新しい企画も次々と生まれている。



視覚障がい者 夢の自動車運転ツアー

また、当社は日本ボッチャ協会に協賛していて、国内初のボッチャ国際大会となるBISFed 2018アジア・オセアニア地区オープン「BISFed 2018 ISE Regional Open」では大会運営に参画、全国特別支援学校ボッチャ大会(通称「ボッチャ甲子園」)では全国から来場するチームの宿泊を手配するなど、幅広くサポートしている。



2018年3月に伊勢市で開催された国内初のボッチャ国際大会  
(画像提供:日本ボッチャ協会)

「ボッチャに深く関わることで、競技大会の運営や選手のお世話、宿泊の環境などについて勉強しています。並行して社内で体験イベントを開催するなど、実際にそのスポーツに触れることで浸透を図っています。」と、第5営業支店の渡邊敏郎専任課長は語る。



渡邊専任課長

### 実際に“触れる”ことでマインドを育てる

さらに、当社では従業員にユニバーサルマナー検定の受講を推進したり、ボランティアとしてサッカークリニックに参加したり、社内でボッチャ大会を開催するなど、自分たちで体験することで、理解の下地を作っている。ユニバーサルツーリズムの推進では、実際のツアーで学ぶ機会を設けて、社員の育成を行っている。その地道な取組が事業につながるケースもある。

「パラスポーツを振興するためには、実際に“触れてみる”ことがスタートだと感じています。目の不自由な方や車いすを利用されている方の気持ちの相互理解にもなりますし、お困りの際にお声がけする“気づき”のきっかけにもなるでしょう。当社では触れる・感じる・体験することからパラスポーツへの関心を高め、知見を広め、貢献できる社員の育成につなげています。」と、総務広報部の渡辺貴光氏は語る。



渡辺氏

同社が、ボッチャの国際大会や平昌パラリンピックにおいて、輸送・宿泊・食事などを大会運営に支障なく進めることができた体験は、社内のナレッジ蓄積にも役立っている。

### 東京2020大会の先に根付く、 パラスポーツ文化

「ロンドンパラリンピックが成功したのは、子どもたちにまでパラスポーツの知識や体験を提供していたからです。東京2020大会で良い結果を出して、そこに関わった人たちの中に知識や体験が残って、それを次のイベントにつないでいく。そこに期待しています。日本に初めてスポーツボランティアが浸透するきっかけにもなると思います。この精神を旅行という枠組みにも発展させていくのが、当社の目標です。観光庁が推進する観光におけるユニバーサルデザイン化の促進で実装する施設が増えれば、車いすの観光客も増えるでしょう。ユニバーサルツーリズムは当たり前になりつつあります。2025年の大阪万博にも活かしていきたいです。」(村澤課長)

### コロナ禍における取組・今後の方向性

パラスポーツはパラリンピックで終わるわけではないので、人々の中でパラスポーツの認知が広がり、ユニバーサル精神が文化として根付く“レガシー”(後世に残せる成果)をTEAM BEYONDとも2020年以降もパートナーとして作っていきたい。

# 手軽に設置できる屋内用誘導マットで パラスポーツ大会をサポート

ゴム製品の製造企業、錦城護膜(きんじょうごむ)。同社製品であるゴム製の屋内用誘導マット「HODOHKUN Guideway(歩導くん ガイドウェイ)」は、凹凸がなくつまずきにくい上に手軽に設置できるため、パラスポーツ大会などのイベントに提供し好評である。ブラインドテニスなど視覚障がい者スポーツ支援にも力を入れている。



錦城護膜株式会社

錦城護膜株式会社  
KINJO RUBBER CO., LTD.



体験会・講習会



協賛

## 企業情報

錦城護膜株式会社 東京支社

【担当部署】ソーシャルイノベーション事業本部  
バリアフリー推進課

【所属人数】11名

【住所】東京都港区芝大門2-12-9  
(HF浜松町ビルディング)

【電話】03-3433-2631

【URL】http://www.kinjogomu.jp/



## 手軽に設置できる誘導マットで パラスポーツ大会をサポート



ゴム製屋内用誘導マット

同社のゴム製屋内用誘導マット(30センチ角)は、誘導ブロックのような凹凸がなく、製品周囲はスローブ形状になっており、床面との段差がほとんどない。そのため、視覚障がい者は、白杖で叩く際の音や踏んだ感触の違い、明度差などで床面と誘導マットの違いを理解する。また、高齢者、ベビーカーや車いす、ヒールのあ

る靴でも無理なく通ることが可能である。

さらに、設置の手軽さも画期的。

誘導マットを必要な分だけつなぎ合わせて、両面テープで貼り付けるだけなので、本格的な工事をせず屋内をバリアフリー化にできる。また、撤去もはがすだけで簡単なので、大会やイベントなど一時的に使いたいときにも便利である。

この特徴を活かして、視覚障がい者が数多く参加するパラスポーツ大会の会場に、誘導マットを提供。同社社員が現地を訪れ、設置と撤去を行っている。

2017年からは日本ブラインドテニス連盟を協賛企業としてサポート。大会会場では、競技紹介のリーフレットや動画も制作。ブラインドテニス競技のPRを行っている。



ブラインドテニス競技を紹介するリーフレット

## 社内のバリアフリーの意識も製品も、 さらなる進化を目指す

同社の誘導マットはすでに国内外で高く評価されていて、国内の盲学校をはじめ、スポーツ施設や病院、大学、図書館、金融機関など約1000か所で利用されている。近年、バリアフリーやユニバーサルデザインへの関心が高まっていることもあり、注目度はさらに上昇中である。



HODOHKUN Guideway

## 豊富なカラーバリエーション

誘導マットの設置作業の際、ボランティアの方たちと一緒に視覚障がいの方のサポートをすることがあるので、ソーシャルイノベーション本部の、バリアフリー推進課のスタッフは全員、ユニバーサルマナー検定を受講し、事前に障がいのある方への接し方を学んでいる。福祉分野に関心が高い同社社長の思いもあり、同社では今後、ユニバーサルマナー検定の受講を全社に広げていきたいと考えている。

「パラスポーツやバリアフリーへの関心を高めるためには、実際にパラスポーツを見たり、障がいのある方と接するのが一番いいと思っています。そのためにも、まずはパラスポーツの観戦会ができるといいね、なんて話しています。」(ソーシャルイノベーション事業部の横内氏) また、誘導マットについてもさらなる進化を目指し、挑戦を続けている。

「すべての方にとって便利な誘導路となるよう、熱癒着シールで行き先などをピクトグラムや文字で表示できるようにしてはいるのですが、誘導マットは視覚障がい者専用とのイメージがあるのか、予算が取りにくいとの相談を受けることがあります。そこで、AIやサイネージを組み合わせることで空間の価値を高めるような誘導路の開発を急ピッチで進めています。」(同部署の

阿部氏)

さらに、今後は新たな視覚障がい者スポーツの支援も検討中である。



(左)阿部氏 (右)横内氏

「まだ広く知られていないパラスポーツがたくさんあるので、今後は、ブラインドテニスの支援を続けつつ、さらに別の競技団体もサポートしていけたらと考えています。」(阿部氏)

障がいが多様なら、障がいのある方が楽しむスポーツもまた多様。だれもが自分にぴったりのスポーツを見つけ、気軽に楽しめる社会を実現するには、錦城護膜のように細やかなところにまで目配りができる企業の存在とそのサポートが大きな力を発揮するのは間違いないだろう。

## コロナ禍における取組・今後の方向性

今後開催されるパラスポーツ大会に対して、誘導マット貸出・設置協力を継続的に実施できるように準備している。またブラインドテニスの魅力を社内にも展開できるよう、練習会や大会への参加や社内イントラサイトへの情報展開などを予定している。

# 社内浸透のキーワードは、「楽しさ」と「期待感」 パラスポーツをきっかけに、だれでも、 だれとでも楽しめる社会へ

長年にわたるスポーツ大会運営の実績を持つ、イベント企画・運営企業のセレスポ。サステナビリティの観点から、パラスポーツのさらなる盛り上げを社内に浸透させる工夫を続けた結果、本業にも好循環が生まれている。目指すのは、パラスポーツ普及の先にある共生社会の実現である。



株式会社セレスポ

セレスポ



体験会・講習会



ボランティア



協賛



アスリート雇用

## 企業情報

### 株式会社セレスポ

【担当部署】人事総務部 コーポレートデザイン室

【担当人数】5名

【住所】東京都豊島区北大塚1-21-5

【電話】03-5974-1111(代表)

【URL】<http://www.cerespo.co.jp/>



## ボランティア活動が、本業へと つながった

まずは、社員たちにパラアスリートを身近に感じてもらうと、同社に勤務している元パラアスリート社員とともに、全国の支店や部署を訪問した。また、同社の物流倉庫に仮設の会場を設置。社員や取引先を招き、車いす利用者の目線でイベントを体験してもらった。また、競技用車いすを使ったパラスポーツ体験会を実施。参加者を募り、社内でポッチャの体験を行ったり、社外のイベントに参加したりした。



パラスポーツをビジュアル化

「しかし、気がつけば、似たような顔ぶれになっていたんです。でも、もっと多くの人、特に無関心層にも参加してほしいと思いました。」(越川室長)

そこで、切り口を変えて、「パラスポーツxビジュアルコミュニケーション」というテーマで公開セミナーを行うことにした。ビジュアル面を前面に押し出した内容にしたところ、期待通り、デザイナーやクリエイターなど、それまでとは異なる層が参加した。

前向きにパラスポーツの盛り上げに関わる社員が増えていったことで、社外にも「セレスポとなら何かできるかも」という評判が広がっていった。

## パラスポーツの盛り上げの先に見ているもの

「私たちが目指しているのは、パラスポーツをきっかけに、障がいのある方や高齢者、子ども、妊婦さん、海外の方などとも「何も気にせず一緒に過ごせる」方法を見つけ

ることです。段差やトイレ、アレルギーなど配慮が必要なことはたくさんありますが、ちょっと工夫すれば、だれもが、だれとでも一緒に楽しめるはず。パラスポーツの応援を通じて、一人でも多くの方にそういう発想を持っていただけたらうれしいですね。」(越川室長)

だからこそ、TEAM BEYONDには、「まずは続けること。そしてスポーツを超えた存在になってほしい。」とリクエストする。

「障がいのある方がイベントに参加するためには、サポートが必要なケースも多いと思います。とはいえ、ご家族や介助者もいつでも何でもできるわけではないと思うので、同時に、ご家族や介助者に対するサポートや工夫も考えなければいけないと思います。」(越川室長)

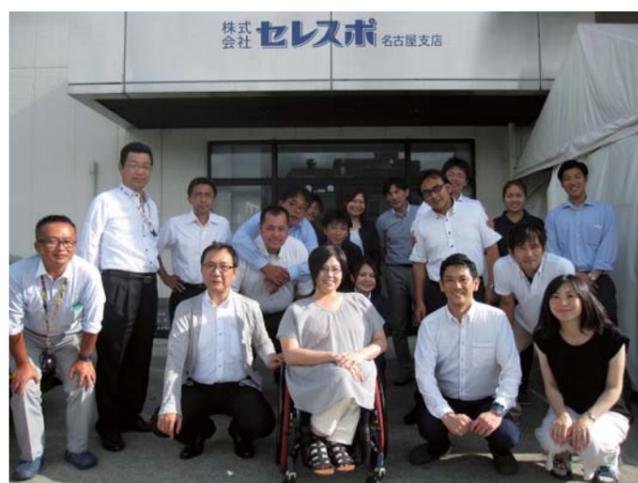


BEYONDというからには、2020年もスポーツという枠も超え、さらには、障がいのある当事者だけでなく、その周囲の人たちにも思いを致すことが必要と、越川室長は訴える。そしてすでに、同社はそうした枠をはるかに超えたビジョンを描き、具体化へ向けて動き出している。

## コロナ禍における取組・今後の方向性

全国各地でパラスポーツ関連の取り組みはかなり増えてきた。これらの取り組みが継続されることが目標の一つ。さまざまなテーマと掛け合わせながら楽しさや学びの選択肢としていくことで、継続開催につなげていく。それが結果として、スポーツや障害を超えた取り組みとなり、共生社会の実現につながると考える。

## パラスポーツ盛り上げを若手社員 育成の機会に



名古屋支店の皆さん

同社は、長年イベント会場のバリアフリー化に取り組んできたが、社長の経営指針として、パラスポーツの盛り上げに取り組むことにした。その手始めとして、ある陸上選手権大会でパラ陸上ブースを出展した。



越川室長

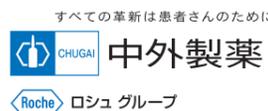
「社内外にパラ陸上を広めるため、『レーサー』という陸上競技用車いすや競技用義足の試乗・装着体験を実施し、陸上ファンにもパラアスリートにも好評でメディアにも注目してもらい、大きな手ごたえを得たと感じていました。ところが、社内では、『なぜ健常者の大会でパラ陸上のブースを出すのか』といった懐疑的な反応が返ってきたんです。仕事でパラスポーツに関わる機会が増えていたとはいえ、まだ本当の意味ではパラスポーツに取り組む意義が浸透していないのだと痛感させられました。」(人事総務部副部長兼コーポレートデザイン室長越川延明氏)

# だれもが一緒に楽しめる障がい者スポーツ その支援を通じ、共生社会の実現に貢献

製薬会社という性格上、社員の健康や障がいへの関心度が高いという中外製薬。活動を展開するうえで、キーワードとなっているのが「延長線上」という考え方である。従来から行っている社会貢献活動や社員の関心の高いスポーツの延長線上にあるものを上手に活用することで、社内外の巻き込みに成功、社員の成長にもつなげている。



## 中外製薬株式会社



### 企業情報

#### 中外製薬株式会社

【住所】東京都中央区日本橋室町二丁目1-1  
【電話】03-3281-6611(代表)  
【URL】<https://www.chugai-pharm.co.jp/>



「スキー検定1級取得者や指導員の資格を持っているなど、スキー経験者たちが集まってくれたのですが、みな自分が得意なことや興味のあることでボランティアができるのがいいねと言っていました。ならば、社員が好きな競技の延長線上にある障がい者スポーツなら、より多くの社員がボランティアや体験会に参加してくれるのではないかと。そう気づけたのは大きかったです。」(加藤氏)



(左)設楽氏 (右)加藤氏

### デフサッカー選手の入社で、さらなる展開へ

こうした活動を通じて、障がい者アスリート支援の重要性もたびたび耳にしていた同社は、新たな決断をする。2017年に障がい者アスリート雇用制度を整え、2018年9月、デフサッカー・デフフットサル選手の設楽武秀(したら・たけひで)氏を迎え入れたのだ。



設楽選手(デフサッカー・デフフットサル)との交流会

設楽氏の活動を社内のSNSを通じて発信。応援メッセージが寄せられるとともに、活動予定を知った社員が試合の応援に駆けつけてくれることもあるという。同社としても一般社団法人日本ろう者サッカー協会のゴールドスポンサーとなり、デフフットボールガイドブック『FLAG』の制作・発行を支援。また、社員とその家族や聾学校の生徒に向けて、デフフットサル体験会や交流会を開催。こうした活動に社員を上手に巻き込むことで、社員の意識に変化が生まれてきた。障がい者スポーツ支援を始めるにあたっては、まずは身近なところからが良いのではと加藤氏は語る。

「例えば、家族向けの工場見学といった社内イベントの際に、車いす体験などから始めてみてはいかがでしょうか。また、現在、社会貢献活動をされているようでしたら、その延長線上にいる方に声をかけてみると良いかもしれません。世の中には、障がい者スポーツ支援をしたいと考えている方は案外たくさんいます。そうした方たちと協力し合い、モノや人、場所といった資源を出し合うことで、さほどコストをかけずに活動を始められると思います。」(加藤氏)



### 啓発冊子と写真パネルの作成からスタート

### 社員の関心が高い競技の延長線上に、巻き込みのヒントがある



写真パネル・障がい者スポーツ用具の展示会

「正直、何から始めたら良いか分からなかった。」と振り返るサステナビリティ推進部社会貢献グループマネージャーの加藤正人氏。まずは社員に障がい者スポーツを知ってもらうことから始めようと、障がい者スポーツを紹介する冊子と写真パネルを作成。冊子は、全社員に配布するとともに、その家族や取引先にも配布したところ、好評であった。



さらに同社では、「ブラインドスポーツ体験会」などの障がい者スポーツの体験会やボランティア活動を実施。社員たちは積極的に参加しているが、その背景には、加藤氏の気づきから生まれたある仕掛けがある。その仕掛けを生むきっかけとなったのが、2016年から特別協賛している「親子で楽しむチェアスキー教室」(日本チェアスキー協会主催)で聞いた社員からの声である。



親子で楽しむチェアスキー教室

### コロナ禍における取組・今後の方向性

当社は今後も、障がい者スポーツが普及していくための環境整備や啓発活動などに取り組んでいく。障がい者スポーツ体験会などのイベントは、人数を制限するなど新型コロナウイルス感染予防対策を講じながら、継続的な支援を実施する。また、障がい者スポーツの普及と共に障がいへの理解促進につながる冊子を作製し、当社が支援するイベント等で配布していく予定。

# 企業にメリットが大きい障がい者アスリート雇用 マッチングから雇用後の マネジメントまでサポート

2012年より障がい者アスリート雇用支援を手掛けているつなひろワールド。トップアスリートを中心に約180件のマッチングを成功させてきた。その背景には、企業と障がい者アスリート双方にとって幸せなマッチングを目指した丁寧な対応と雇用後もきめ細やかにサポートする体制、そして障がい者アスリートと混じり合う社会の実現を目指したいとの想いがあった。



株式会社つなひろワールド



体験会・講習会



協賛

## 企業情報

### 株式会社つなひろワールド

【所属人数】8名  
【住所】東京都千代田区神田佐久間  
河岸84 サンユウビル502  
【電話】050-3513-6894(代表)  
【URL】<https://www.tsunahiro.com>



### Glitters

記事内にも紹介があった株式会社つなひろワールドが運営、発行するメディア。障がい者アスリートたちの世界選手権での活躍を描いた特集や迫力あるビジュアルで綴る新感覚のマガジン

【URL】<https://www.glitters.jp>  
【運営】株式会社つなひろワールド



## 障がい者アスリート雇用は、 視野を広げて検討を



会場で日本代表を応援する竹内社長(中央)

「障がい者スポーツ支援は多様で、何から始めるべきか迷う企業は少なくありません。そのファーストステップとして、障がい者アスリートの雇用がおすすです。」と、竹内圭代表取締役社長は語る。実際、企業は、障がい者アスリートを雇用すると

経済的負担がかかる。

しかし、競技に打ち込む障がい者アスリートが入社し、その活動を社員が一丸となって応援すれば、一体感が生まれ、社員のモチベーションや帰属意識の向上も十分期待できる。さらに、自社の社名を背負った選手が国内外の大会で活躍してメディアに露出する機会が増えれば、広報的な価値は計り知れない。

近年、障がい者アスリートの雇用を希望する企業が増加しており、トップ選手はもちろんのこと、次世代の選手等の雇用も増えているという。障がいが多様であるのと同様、障がい者スポーツも非常にバラエティに富むため、視野を広げて雇用を検討したい。

## 障がい者アスリートを支えるために、 雇用後に大切なこと

雇用後の、受け入れ態勢を整えることも大切である。彼らが競技に打ち込める環境を求めているのは間違いないが、ただ競技ができればいいと考えているわけで

もない。企業に所属するからにはその企業の一員であるという実感がほしい、企業や同僚のためにがんばりたいと思っている。



竹内社長

「観戦などを通じて競技活動を応援してあげてほしい。」と、竹内社長は語る。とはいえ、いきなり全社を挙げて、と力む必要はない。イントラネットなどを通じて障がい者アスリートの活躍ぶりを紹介しながら、徐々に社内に応援の輪を広げていく例が多い。最近では、参加者を募って応援に行く企業も増えている。同僚が戦う姿に社員が刺激を受け、応援に行ってきたとの声もある。また、煩雑になりがちなマネジメントに戸惑うケースもあるという。障がい者アスリートの勤怠・スケジュール管理やメディア対応などの広報業務、活躍次第では勤務体系の見直しや海外チームへの移籍なども発生するため、それなりのノウハウが必要となる。同社にも設立当初からそうした相談が寄せられたため、2014年から「アスリートマネジメントサービス」を提供。企業と障がい者アスリート双方から高評価を得ている。



車椅子ソフトボールチーム「Glitters」の皆さん

## 発掘・育成、就労、そして引退後まで 支援の幅をもっと広げたい

同社は、障がい者アスリートが活躍する姿を伝え続けたいと、障がい者スポーツ専門メディア『Glitters』を創設。WEBとSNS、そして雑誌を通じ、国内外の障がい者スポーツ大会で躍動する選手たちの様子をその成績いかににかかわらず発信している。また、そのメディア名を冠した車椅子ソフトボールチーム「Glitters」も立ち上げた。



車椅子ソフトボールは、健常者と障がいのある人が一緒にプレーして大会にも出場できる競技。この車椅子ソフトボールチームを起点に、障がい者アスリートをもっと幅広く支援する場を作り、障がい者スポーツ界全体を盛り上げていきたいと竹内社長は語った。

## コロナ禍における取組・今後の方向性

コロナ禍で働き方が変わりつつある今、当社も積極的にリモートワークを取り入れ、オンライン面談などを行っている。マネジメントサービスについても、企業との連携を強化し、アスリートが安全第一で活動できるような環境づくりを行っている。また、車椅子ソフトボールチーム「Glitters」も感染症対策を講じながら、活動を再開し始めた。

## 障がいへの理解を広め、 より多くの義足ユーザーに スポーツを楽しんでもらうための活動を展開

スポーツ用義肢を扱い、義手・義足のアスリートを支える公益財団法人鉄道弘済会義肢装具サポートセンター。障がい者スポーツの門戸を広げようと、スポーツ用義足の板バネを貸し出すとともに、カーボン製よりも低価格で提供できるナイロン樹脂製の板バネを開発。さらに出張授業や同センターへの見学受け入れにも力を入れている。



### 公益財団法人鉄道弘済会 義肢装具サポートセンター



体験会・講習会



協賛



技術支援・  
製品開発

#### 企業情報

公益財団法人鉄道弘済会  
義肢装具サポートセンター

【所属人数】65名

【住所】東京都荒川区南千住四丁目3-3

【電話】03-5615-3313(代表)

【URL】<http://www.kousaikai.or.jp/support/>



### 板バネの貸し出しや開発で裾野を広げる



(右)義肢装具士の白井氏

同センターの義肢装具士・白井二美男氏は、個人的な活動として、約30年前から義足ユーザーを中心とした陸上チーム「スタートラインTokyo」を主宰。多くの義足ユーザーにスポーツの楽しさや体を動かす気持ちよさを伝え、国内外の障がい者スポーツ大会に出向き、障がい者アスリートをサポートしてきた。

障がい者スポーツの裾野を広げたい。そう考えた同センターは、2015年よりカーボン製のスポーツ用義足、通称

「板バネ」の貸し出しをスタート。

多様なアスリートに板バネを貸し、意見を聞くことで、新たな板バネの開発にもつなげている。

また、子ども向けにもっと手に入れやすいものにと、ナイロン樹脂製の板バネを開発し、2019年に意匠登録。この板バネは、大人の女性でも使用可能となっており、さらなる改良に取り組んでいる。



スポーツ用義足の製作

#### 理学療法士とともに初心者向け 走行体験会を実施

同センターに通っている1000人にアンケートを実施したところ、約30%が「スポーツをしてみたい」「板バネを

履いてみたい」と回答。しかし、実際にスポーツをするまでには至っていなかった。

「スポーツをしない理由の一つに、どこに行けばいいかわからないという声が多かったのですが、これには正直、驚きました。メディアで白井の活動を取り上げていただく機会が増えているので、ご存じの方も多いのではと思っていたのですが、こちらの想定以上に知られていなかったわけです。」と、中野啓史所長。



競技用義足を使用した  
走行体験会の様子



理学療法士と一緒に  
義足体験

そこで、2017年より日常用義足を履いている方を対象に、同センターの屋上で競技用義足を使用した走行体験会「THE FIRST STEP」をスタート。走行体験会開催時は、診療所を併設しているため、理学療法士と義肢装具士のサポートに加え、医師や看護師も駆けつけられる環境にあり、安心して板バネ体験を楽しめるようにしている。「ほんの数カ月前に社会復帰し、歩いたり走ったりしている方たちを見ると、切断直後の入院患者は、少し先の自分の姿を思い描け、大きな励みになるようです。」(中野所長)

#### “義足ユーザーも自分たちと同じ” 子どもたちが実感できる出張授業

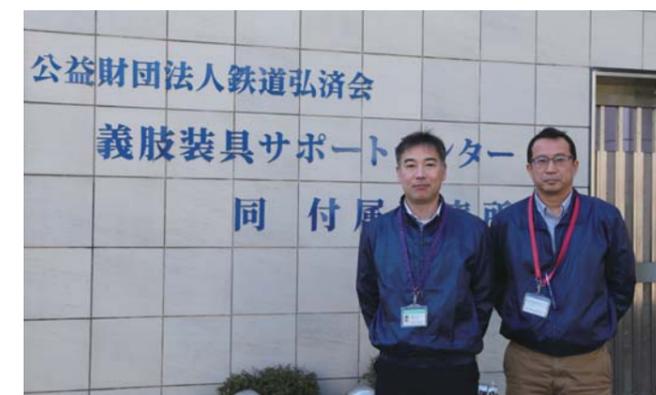
同センターでは、展示室の見学だけではなく、患者のリハビリの様子を見たり、義足体験も行っている。下肢を切断してから、義足を履いて歩けるようになるまではもちろんのこと、街中を義足で歩くことがいかに大変か、さらに、障がい者アスリートが、板バネで跳んだり走ったりすることがいかにすごいかを実感できる。

また、出張授業も行っており、義足ユーザーも自分たちと何ら変わらないということ子どもたちに知ってほしいとの先生方の声を受け、義足の職員が同行している。

そして、義足体験とともに、義足の職員が下肢切断に至る経緯を話したり、板バネで走る様子を見せたり、子どもたちに断端(切断部)を触ってもらったりしている。

同センターの活動の様子を鉄道弘済会内のイントラネットで発信することで、全国に点在する各事業所間一体感が生まれ、帰属意識の醸成にも一役買っている。出張授業には、次世代育成の意味も込められている。下肢切断の理由の多くは糖尿病や腫瘍といった病気で、高齢の方が多く、義足のニーズもそのほとんどが日常用であり、スポーツ用義肢のニーズが少ないため、義肢装具士も増えにくい。全国に約4000人いる義肢装具士のうち、スポーツ用義肢に関わっている者はほんの数人で、明らかに不足しており、義肢装具士の育成が急務である。今後も、同センターの取り組みは続く。同様に、企業や団体、学校でも障がい者スポーツ支援や障がい者理解への取り組みを続けてほしいと願っている。

「障がいや義足を知ることは障がい者スポーツ支援の第一歩となり得ます。そのきっかけとして、ぜひご利用いただけたらと思います。」と、打越昭宏総務課担当課長は語る。



(左)打越課長 (右)中野所長

### コロナ禍における取組・今後の方向性

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、例年実施していた「THE FIRST STEP」や出張授業等のイベントの再開は未定の状況である。しかし、毎年開催している「義肢装具サポートセンター施設公開」のオンライン開催を当センター初の試みとして実施した。今後は、「withコロナ時代」に適應するため、積極的なオンライン化を推進していく。

# 大切なのは情報！ 多彩な取り組みで、パラスポーツの 盛り上げと共生社会の実現を目指す

パラスポーツ支援を共生社会実現へのきっかけと捉え、社内外向けイベントをはじめ、オリパラアンバサダー制度や社内ポッチャ大会、オリジナルポロシャツ製作、情報紙発行など多彩な活動を展開。TEAM BEYONDを通じて得た情報も参考にしながら、パラスポーツを盛り上げている。



## 東京ガス株式会社



### 社員を巻き込むオリジナル制度 「オリパラアンバサダー」



障がい者スポーツ体験会の様子

2013年に日本障がい者スポーツ協会のオフィシャルパートナーとなって、パラスポーツ運営ボランティアを社内募集するなど、ひと足早くパラスポーツに関わってきた同社。2015年に「東京2020オフィシャルパートナー」となっからは、パラスポーツと共生社会への理解を促す多彩な取組を行っている。



### 企業情報

#### 東京ガス株式会社

【担当部署】東京2020オリンピック・パラリンピック  
推進部 コミュニケーション推進グループ

【所属人数】13名

【住所】東京都港区海岸1丁目5番20号

【電話】03-5400-3813(代表)

【URL】<https://www.tokyo-gas-2020.jp/>



同社では、オリパラアンバサダー制度を実施しており、各職場のオリパラ活動のけん引役となっている。



芳賀グループマネージャー

「パラスポーツに触れることで、社会には多様性があることを自然と理解できるようになります。でもそこで終わるのではなく、パラスポーツ支援で得た気づきや理解を仕事にも活かせるようになってほしい。これは多様なお客さまとの接点がある当社にとって、とても大切なことです。」と、東京2020オリンピック・パラリンピック推進部コミュニケーション推進グループマネージャーの芳賀千恵さんは語る。

### TEAM BEYONDから得るのは、 一步を踏み出すために必要な情報

「まずは、比較的取り組みやすいパラスポーツの観戦会や体験会などから始めましたが、それ以外のことにも挑戦したいと思っても、当時は情報がほとんどなかったため何をしたらいいのかわからず、模索しながら活動を進めました。そんな頃、TEAM BEYONDのメンバーになって、情報を得られたことが、本当に良かったです。」と実感を込めて語る芳賀グループマネージャー。



「先日参加したTEAM BEYONDのワークショップでは、雇用したパラアスリートのイベント等での対応や教育、引退後のキャリアなど、先駆的な取組をしている他社様の事例を伺い、大変参考になりました。また、当社ではまだ顕在化していない課題についての予備知識が得られることもあり、いい勉強になっています。カンファレンスやワークショップで他社のオリパラ担当者知り合えるのも魅力です。どの企業様も模索しながら進めているため、必ずしも解決策が得られるわけではないのですが、お互いの状況が分かるだけでも違うと思います。」(芳賀グループマネージャー)

### ここまで育ててきた火を、2021年 以降につなげたい

今後もパラスポーツの盛り上げを加速させるために課題を二つ設定している。

その一つは、パラスポーツを盛り上げるために、もっと多くの社員にパラスポーツに関心を持ってもらうこと。

そのために、パラスポーツ観戦会、情報誌全社員メール発信、オリジナルポロシャツの制作等、あれこれ悩みながら手を打っているところである。

二つ目は、2021年以降への対応である。

「パラリンピックが終わっても、共生社会の実現という課題は引き続き取り組むべきものだし、オリパラアンバサダーや、ポッチャ大会にしても、数年かけてここまで育てて盛り上がってきているので、その火を消すことなく、上手に社内につなげていかなければと思っています。そのために社内あるいは他社様との連携で何に取り組んだらよいか?は、どの企業にとっても難しいですが大変重要な課題です。TEAM BEYONDには、その先導役になっていただきたいです。」(芳賀グループマネージャー)



東京2020オリンピック・パラリンピック推進部の皆さん

### コロナ禍における取組・今後の方向性

今後も当社の活動の方針は変わるものではないが、コロナ禍においては、競技会場に集まって頑張る選手に声援を送ったり、みんなでパラスポーツを体験したりといった、これまで行ってきたような活動については、難しい面がある。3密を避けてソーシャルディスタンスを守る、オンラインを活用する等、工夫をして活動を実施していく。

# 目指すは「パラスポーツの日常化」 “想い”のある人をつなげ、 自走する仕組みをつくる

25年以上、車いすテニスを支援してきた日本電気株式会社。東京2020大会開催決定を機に、障がいのある人もない人もパラスポーツで集える「パラスポーツの日常化」を目指し、パラリンピック銀メダリストの上原大祐氏とともに精力的に活動。また、ボッチャの各大会で優勝している注目のNECボッチャ部も、その活動に広がりを見せている。



## 日本電気株式会社

Orchestrating a brighter world



### 日常にパラスポーツがある社会の実現に向け、 活動の場を社内に加え社外へ

「日常の中にパラスポーツがある。会社でも学校でも地域でも、障がいのある人もない人も、パラスポーツで一緒に集える、そんな社会の実現を目指して活動を展開することにしました。」と同社東京オリンピック・パラリンピック推進本部企画グループの荻野智史主任は語る。



荻野主任

まずは社員にパラスポーツを知ってもらおうと、車いすバスケットボールやブラインドサッカー、ゴールボールといったパラスポーツの体験会や観戦会を定期的に行う。リオ2016大会が終わり、次はいよいよ東京という

頃には、少しずつだが、パラスポーツの普及や共生社会の実現に“想い”のある社員たちも増えてきた。

「社内向け活動だけではなく、今後は社外に向けても積極的に発信や機会創出をしていこうとの機運が自然と高まってきました。」(荻野主任)

そのタイミングで同社に入社したのが、パラアイスホッケー銀メダリストの上原大祐氏。現役引退後は、パラスポーツの普及活動を行っていた。同社入社後、現役復帰し、2018年の平昌大会にも出場した。



上原氏(元パラアイスホッケー日本代表)



観戦会



体験会・講習会



ボランティア



協賛



アスリート雇用

### 企業情報

#### 日本電気株式会社

【担当部署】東京オリンピック・パラリンピック推進本部

【所属人数】約50名

【住所】東京都港区芝五丁目7-1

【電話】03-3454-1111(代表)

【URL】<https://jpn.nec.com/>



### “想いのある人”をつなげ、自走する 仕組みをつくる

パラスポーツの普及を進めるにあたり、取り組み内容を3つのカテゴリーに分類した。

- 1.パラスポーツ大会への協賛や、特別支援学校等で体験会や講演会などを行う「パラスポーツ自体へのサポート」
- 2.社内外のパラスポーツの理解を進める「普及・推進活動」
- 3.パラスポーツを地域社会に根付かせるための「社会・しくみ作り」の取り組みに働きかける。

そこで力を入れているのが、地域にいる“想い”のある人たちをつなげ、支援する活動である。

「企画を立てたら、障がい者スポーツ団体や商工会議所など“想い”のある人がいそうなところを一軒一軒回ります。そして、イベントの企画段階から参加していただき、一緒に地域のチームを作り上げていきます。」(荻野主任) その一例として、障がいのある人とない人が混ざり合い、ボッチャや車いすバスケットボールで競い合う長野県民パラスポーツ大会をこれまでに3回開催した。



長野県民パラスポーツ大会

このような活動が地域連携につながったり、各方面から評価を得たりと会社としても意義のある活動になっている。だからこそ、東京2020大会が終わっても、取り組みを継続していくべきだと思っている。

### 本気だからこそ活動の場が広がっていく 「NECボッチャ部」

パラスポーツの日常化への取り組みは、社内でも実践している。2017年に同社の公式部活動として、NECボッチャ部が発足。以来、月に3回程度、社内施設や、近隣

の体育館で練習会を実施し、大会にも参加。社内の勉強会や研修で行うチームビルディングのアクティビティとしてはもちろん、懇親会でも、部員がボッチャセットを持参し、競技説明や審判をしている。



NECボッチャ部の活動

さらにその活動は社外へも大きく広がっていて、自治体のボッチャイベントのサポートや、小学校などでのボッチャ体験会の運営、ボッチャ選手とご家族との交流会や合同練習会なども行っている。

東京2020大会が閉幕しても、同社にはNECボッチャ部が、そして上原氏や荻野主任のように“想い”のある社員が残る。これこそが東京2020大会をきっかけに得た同社のレガシーだろう。そして、このレガシーがある限り、同社が目指すパラスポーツの日常化への取り組みの火は、大会以降も燃え続けるであろう。



部員の皆さん

### コロナ禍における取組・今後の方向性

ICTを駆使し、パラスポーツの普及をさらに加速！社内外に向け、オンラインパラアスリート対談を定期的に配信することで、パラアスリートの皆さんの活躍の場、パラスポーツの普及の場の創出を実施。また、自社の「体温をカメラで検知するサーマルカメラ」等のソリューションをパラスポーツイベントの入退場に導入する取組などを通し、参加者が安全安心な形で楽しめるサポートも開始している。

# 東京2020大会をきっかけに 築き上げた独自の取り組みの数々は、 未来へ引き継ぐべきレガシー

東京2020大会をきっかけに、将来必須となるユニバーサルデザインやインクルーシブといった価値観をグループ企業内に根付かせようと活動。パラスポーツ大会の観戦活動は、社員の家族を巻き込むことや、社内に在籍しているパラアスリートと、社員が共に支え合う取り組みを実施している。



NTT（日本電信電話株式会社）



## 企業情報

### 日本電信電話株式会社

【担当部署】新ビジネス推進室2020  
渉外担当  
【所属人数】8名  
【住所】東京都千代田区大手町1-5-1  
大手町FSイーストタワー  
【電話】03-6838-5111(代表)  
【URL】http://2020.ntt



### NTTクラリティ株式会社

【担当部署】営業部2020推進PT  
【所属人数】8名  
【住所】東京都武蔵野市緑町3-9-11  
【電話】0422-50-8347(営業部)  
【URL】https://www.ntt-clarity.co.jp



## グループ社内で働くパラアスリートと 一緒になって

同社は、グループ横断での応援に加え、パラアスリートと一緒に取り組む取り組みも展開している。観戦応援だけでなく、アスリートによるグループ社員向けの「心のバリアフリー研修」も実施している。障がい当事者から直接研修を受けることで、考え方が大きく変わることもあるようである。

2018年には、「パラスポーツ応援キックオフ」を開催し、グループ企業全体に、社員アスリートを紹介するイベントを行った。



社員とご家族の皆さん

働きながら、練習を重ねている「5人制サッカー」の田中章仁氏(NTTクラリティ株式会社営業部アクセシビリティ推進室兼2020推進PT担当課長代理)は、こう語る。



田中選手(5人制サッカー)

「僕自身、ほかのグループ企業に所属しているパラアスリートの存在を知ることができて励みになっています。また、選手は声援が大きいほど力が湧くものなので、グループ全体として応援していただけることをうれしく思います。パラアスリートの活躍を知ること、将来への希望を感じる方もいらっしゃると思いますし、次世代のパラアスリートの育成にもつながります。」

## 築き上げてきた仕組みをレガシーとして 残すために

「NTTはパラスポーツの応援や心のバリアフリー研修などを通じ、グループ間の横の連携、特に個人レベルにまで落とし込まれた連携が、確実に強まっていると感じています。これは私たちがオリンピック・パラリンピックを通じて築いてきた、2020年以降もNTTグループのレガシーとして継続していきます。」(吉川部長)

また、パラスポーツ支援の機運醸成は、企業の垣根を越えて行ってこそ意味があると、吉川部長と永谷主査は語る。「パラスポーツを盛り上げる方法が分からない企業様ほど、TEAM BEYONDに参加するのいいと思います。すでにパラスポーツ支援に取り組んでいる企業のご担当者から、直接、その活動方法や効果が聞けますし、大会観戦にも気軽に参加できます。一度、経験すれば、パラスポーツに触れる価値を体感できるはず。これから必須となるユニバーサルデザインやインクルーシブという新しい価値観を社内に植え付けたいと考えている企業にとって、素晴らしいプラットフォームだと思います。」(吉川部長)



応援に駆け付けた社員とご家族の皆さん

※企業情報・役職については、2019年5月時点のものです。

## コロナ禍における取組・今後の方向性

Withコロナの取組として、リモートストレッチ動画の配信を、公式Youtube(NTTグループエクササイズチャンネル)で行っている。パラアスリート田中章仁選手の動画は、目隠した状態で音の情報だけで身体を動かしている。障がい当事者が講師をする「心のバリアフリー研修」もオンライン研修を準備するなど、今できることを工夫しながら、取り組んでいる。

## 選ばれ続ける企業になるために不可欠な 感覚をパラスポーツを通じて養う

企業としての成長と、自社のICT活用で社会の発展を目指す同社。



永谷主査

「インクルーシブ社会でパートナーとして選ばれ続ける企業となるために必要なことが、パラスポーツやパラアスリートに触れることで分かるようになると思います。」(新ビジネス推進室2020渉外担当永谷主査)



吉川部長

そのために取り組んでいることのひとつが、パラスポーツ観戦である。大会は土日開催が多いことから、子どもや家族との参加を促す「キッズプログラム」を実施。試合後に行う、パラアスリートへの質問コーナー「キッズインタビュー」などもあり、好評である。「この取り組みは、社員に対しても、次世代の子どもたちを育てる意味でも意義のあるプログラムだと思うし、さらに活動を活性化させたいと思います。」(新ビジネス推進室2020渉外担当吉川勲部長)

# 学生パワーでパラスポーツ大会運営を全面的にサポート 想があれば、一步を踏み出せる

アクティブラーニングの一環として、スポーツトレーナーを目指す学生を日本パラ・パワーリフティング連盟に派遣。また、全学を挙げて大会運営もサポート。パラスポーツ支援を学生の成長の機会につなげている。また、共生社会実現へ向け、教育機関ならではの具体的な取組も検討し始めている。



日本工学院  
八王子専門学校

日本工学院八王子専門学校



## 企業情報

学校法人片柳学園日本工学院八王子専門学校

【住所】東京都八王子市片倉町1404-1

【電話】042-637-3111(代表)

【URL】<https://www.neec.ac.jp/hachioji/>

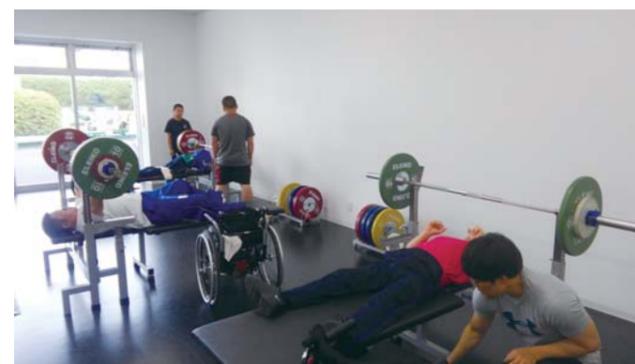


ブリックビューイングで放映していただいたんです。授業とは違う真剣勝負に挑み、失敗したら多くの方にご迷惑をかけてしまうという緊張感の中でやり遂げた経験は、学生にとって大きな財産となったと思います。」(中山総轄カレッジ長)

## まずはできることから、学生の派遣をスタート

約2年前、同校はSDGs(持続可能な開発目標)の中で、示された17の目標のうち4つ目の「教育」に着目。何ができるか模索した結果、出した答えの一つが、パラアスリート支援だった。

「当校がすぐに支援できるパラスポーツって何だろうと探してたどり着いたのが、スポーツトレーナー科で学ぶ学生によるパラ・パワーリフティング選手をサポートでした。」(中山総轄カレッジ長)



学生によるパラ・パワーリフティング選手をサポート

早速、日本パラ・パワーリフティング連盟に打診したところ、同連盟は快諾。以来、同校から学生を連盟に派遣し、専門のトレーナーとともに選手のサポートに当たっている。

こうして良好な関係を築く中で、大会運営にも協力することになったとのこと。

「プロの視点から言わせていただくと、もっとエンターテインメント性を高められると思っています。音楽も照明も光の演出ももっとダイナミックなものにしたいね、なんて教員同士でも話しています。」(中山総轄カレッジ長)

伝用のポスターやチラシ、記念Tシャツのデザイン、大会当日のカメラ中継、大会運営の補助員、応援用グッズや会場案内図の制作、大会運営ボランティアなど、多岐にわたって協力した。

「スポーツ団体とのコラボレーションも当校としても初の試みとなりましたし、なかなかない事例と伺っており、貴重な機会となりました。」と山野大星理事・副校長は、充実感をにじませた表情で語る。



(左)中山総轄カレッジ長 (右)山野副校長

「学生たちが作り上げたステージを映像制作を学ぶ学生たちが撮影、さらにその映像をスカイツリーでのパ

## パラスポーツ支援をきっかけに、新たなビジョンを描く

「大きな資金を使わずとも、もともと保有している施設や人材を活かせば、十分にパラスポーツ支援ができることを示した日本工学院八王子専門学校。その一步を踏み出すのに必要だったのは「想い」だけでした。」と、中山総轄カレッジ長は語る。



「シンプルに施設を貸し出すということでもいいのですが、その先に人間教育をしたいといった目的があれば、自ずとパラスポーツとの関わり方も見えてくると思います。ですから、まずはパラスポーツ支援を通じて何がしたいのかという目的をしっかりと考えることが肝心ではないでしょうか。そして強い想いがあれば、あとは行動に移すだけです。相手に想いが伝われば、そこからいろいろなものが生まれるのだと、私も今回の経験で学びました。」(中山総轄カレッジ長)

同校は新たなビジョンを描いている。二葉栄養専門学校と提携しての「スポーツ栄養士トレーナー」の育成や、障がいのある方が多彩な学びのできる環境の整備や制度づくりも検討していきたいとのこと。

パラスポーツ支援をきっかけとした共生社会実現への新たな、そして具体的な取組が八王子から始まりつつある。

## コロナ禍における取組・今後の方向性

ニューノーマルな時代に適した「ICTを活用したスポーツイベント」の仕組み作りにも挑戦。無観客でも盛り上がる会場、参加することへの喜びを感じることができる仕組みなど、様々な企業と連携してサポートできればと考えている。今後も本校が育成する様々な専門分野の職業人材「若きつくりびと」とともに、パラスポーツをサポートしていきたい。

# 仕組みづくりと社員の意識の変化を パラスポーツ支援が後押しする

東京2020オフィシャルパートナーの日本航空。社会の変化に応じてスタートしたバリアフリーへの取り組みは、パラスポーツ支援へと発展。会社の取り組みがきっかけで社員の意識が変化し、ユニバーサルツーリズム実現に不可欠な推進力となっている。



写真提供：日本財団パラリンピックサポートセンター

## 日本航空株式会社



観戦会



体験会・講習会



ボランティア



協賛

### 企業情報

#### 日本航空株式会社

【担当部署】総務本部 ブランドコミュニケーション・東京  
2020オリンピックパラリンピック推進部  
ブランド・コミュニケーション企画グループ

【所属人数】13名

【住所】東京都品川区東品川二丁目4-11  
野村不動産天王洲ビル

【URL】<https://www.jal.co.jp/>  
<https://www.flyforit.jp/>



## 世の中の動きに応じて推進したバリアフリー



下條執行役員による講演

同社は現在、障がい者スポーツ団体やパラアスリートのサポートをはじめ、パラスポーツ関連イベントへのボランティア参加など、多彩な活動を展開している。同時に、本業においても、多様な旅行者を受け入れるための対応も急ピッチで進めている。

「道路交通法の改正や米国航空アクセス法の施行など、世の中の動きに応じ、1986年、一部機材に車いす用ト

イレを設置。以来、障がいがある方や病気やけがをしている方の相談窓口「プライオリティ・ゲストセンター」を開設、赤ちゃん連れや妊娠中の方、高齢者の搭乗をサポートする「JAL スマイルサポート」を開始するなど、少しずつ体制を整えてきました。」と、同社執行役員の下條貴弘氏は語る。



ボッチャ大会の様子

そして、同社がパラスポーツに関わるきっかけとなったのは、2005年の公益財団法人日本障がい者スポーツ協会（日本パラリンピック委員会）とのオフィシャルパートナー契約の締結である。以後、選手個人や競技団体へサポート

対象を拡大。パラ選手団の移動と、それに伴う非常に多くの用具や荷物の輸送で経験を重ね、知見を蓄えてきた。

## 全国各地での社員の巻き込み

「仕事としてパラアスリートや用具の輸送に関わっている社員は大勢いましたが、私たちが進めようとしていること、現場の社員たちの意識の間にギャップがあるように感じました。」と、コミュニケーション本部の佐藤好（このみ）氏は、振り返る。



佐藤氏

北海道から沖縄まで、全国にいる社員全員に等しくパラスポーツに関心を持ってもらうにはどうしたらよいか——。アイデアを求めて他社のオリンピック・パラリンピック担当者などから情報を収集。各地で、渦の中心となってリーダーシップを発揮してくれる社員を募集した。募集して集まった社員が中心となって、全国各地でポッチャ大会を開催したり、近隣で開催されるパラスポーツイベントに同僚を誘って参加したりと、積極的に活動している。また、定期的に報告会を開催して情報共有と意見交換を行っている。

「昨年10月に開催された車いすラグビーワールドチャレンジ2019では、ボランティアに約40名、観戦に約150名が集まりました。2019年度の初めに『「応援に行こう」「応援をしよう」プロジェクト』を立ち上げ、早々に告知したことや、JALが一丸となって応援することを打ち出すため、お揃いの赤いウェアと専用の応援席を用意することをアピールしたのが功を奏したと思います。」(佐藤さん)

今後の課題は、まだパラスポーツに触れたことがない人の巻き込み方である。いろいろな角度からパラスポーツのすばらしさに触れられるイベントへの参加を促すことが大事である。

## 社員の意識の変化が 企業活動を進める力になる

パラスポーツ支援を通じて生じた多様性への理解や意識の変化は、次のステップとして、仕事や職場へ良い形で還元させ、企業活動の活性化につなげていくことである。「法整備を含めた世の中での仕組みの進展に会社が対応することによって、社員の意識が変化し、それがよりお客さまの立場に立った会社の対応へとつながる——。これがサイクルとして回るようになってきています。そして、このサイクルを作るうえで後押ししたのが、パラスポーツとの関わりでした。」と下條氏は語る。



「応援に行こう」「応援をしよう」プロジェクト

「こうしたサイクルは業種や業態、企業の規模などによって千差万別でしょう。また、この取り組みには完成形はありません。ですから、まずはいろいろと試してみることが重要で、それが結局、成果を得る近道になるのではないかと思います。また、このサイクルは大きく長く回すことも大切です。そのためにも、今後も一つ一つの事例を見逃すことなく、社内で広く共有し、社員の意識を高め続けていきます。」(下條氏)

※本文については、2020年2月時点のものです。

## コロナ禍における取組・今後の方向性

JALグループ全社員を巻き込み、オンラインを活用して競技の応援企画を行うことで、画面を通して社員にパラスポーツに触れる機会を提供し、互いに認め合い思いやれる社員の集団を目指している。また、こうした取り組みを通じて、引き続きパラスポーツ、パラアスリートをサポートしていく。

# パラスポーツ観戦の目的を 明確にした上で、 「応援したくなる気持ち」を丁寧に育てる

日本生命は、人材育成および共生社会の実現・パラリンピックの成功など地域・社会が取り組むテーマに対して、同社が協賛している車いすバスケットボールを中心に積極的に取り組んでいる。全国の社員にパラスポーツ観戦を呼びかけるため、イントラネットを中心に情報を発信。動画も活用し、パラスポーツの魅力を分かりやすく訴求している。



日本生命保険相互会社



## 人材育成とパラリンピックの盛り上げを連動



皇后杯日本女子車いすバスケットボール選手権大会の様子

同社は、パラリンピックへの関心の向上、応援機運の醸成を図るとともに、「支えることの大切さや楽しさ」を社会に広めたいとの想いから、パラスポーツ観戦を、本格的に取り組み始めた。

「当社では、企業スポーツ応援の文化が根付いていたものの、パラスポーツ観戦においては、なかなか共感しても

られませんでした。そこで、2015年からスタートしていた、人材育成のための「人財価値向上プロジェクト」と、パラリンピックを紐づけることにしました。」(オリンピック・パラリンピック推進部東京2020推進担当 荻野祥太課長)



荻野課長

手始めに、2016年2月に、国際親善女子車いすバスケットボール大阪大会の観戦希望者を募集。複数の部署とも協力しながら、情報を発信。最初の観戦会には約300名が参加した。以後、全国のパラスポーツ大会のスケジュールを随時掲載して観戦を呼びかけ、観戦会の回数を増やすなどして、これまでに、延べ約2万名が観戦に参加した。



### 企業情報

日本生命保険相互会社

【担当部署】 オリンピック・パラリンピック推進部

【住所】 東京都千代田区丸の内1丁目6番6号

【URL】 <http://special.nissay-mirai.jp/tokyo2020/>



## きめ細やかな情報発信で盛り上げを演出

競技や選手に興味を持ってもらうために、力を入れたのが、イントラネットによる情報発信である。まずは、ルールや魅力といった基本的な情報を掲載。さらに、同社社員の北間優衣選手の生い立ちや、競技を始めたきっかけ、意気込みなどを取材。その様子を撮影した動画を、幼い頃の写真やオフショットも織り交ぜて編集し、アップした。



オリジナルTシャツとスティックバルーンで応援

「地道ですが、情報をこまめに発信しています。それを見て、大会会場で観戦・応援に行ってみようと思っていただければ、うれしいですし、全社員がパラスポーツに興味を持った状態で、東京2020大会の本番を迎えられたらと期待しています。」(荻野課長)

## パラスポーツ観戦は企業にとってもメリット

車いすバスケットボールを盛り上げようという活動は、社外に向けても展開している。同社が協賛する大会の観戦地域では、車いすバスケットボールの競技・魅力の認知やファン拡大に向けて、お客様に対して、観戦・応援の案内活動を行っている。

東京2020大会を日本全国で盛り上げるために、2018年9月から全国展開した「日本生命 みんなの2020全国キャラバン」では、車いすバスケットボール体験ブースを設置し、約2万名が参加するほど好評であった。

また、同社の契約選手が登場するプロモーション動画や、スポーツを通じて、地域活性化を描いた漫画も公開中である。その一つに、女子車いすバスケットボールのプレーと若きアーティスト SASUKE氏がコラボした、動画「The Beats of Game」も、新たな側面から競技の魅力伝えていく。



「The Beats of Game」の動画  
▼こちらからご覧いただけます  
<https://www.youtube.com/watch?v=9YmXhL29Bww>

「パラスポーツ観戦は、人材育成の観点で成長の機会となるのと同時に、当活動を通じて、社会のサステナビリティ(持続可能性)の向上に貢献していくことが、結果的に、お客様からの信頼に繋がっていくと信じています。昨今、ダイバーシティやSDGs(持続可能な開発目標)といった課題を社会全体で解決していこうという大きな流れがある中、まず始められることのひとつが、パラスポーツ観戦ではないでしょうか。まずはTEAM BEYONDに加入して情報を得たり、気軽に大会観戦を楽しまれたりすることをおすすめしたいです。」(荻野課長)

## コロナ禍における取組・今後の方向性

「日本生命 みんなの2020全国キャラバン」の車いすバスケット体験ブースでは、「参加者と選手の絆づくり」を目的として、体験人数に応じて、車いすバスケット選手に応援ボールを贈呈する企画を実施。約2万名に体験いただいた結果、全国の車いすバスケット選手768名全員に、コロナ禍で一時中断していた練習の再開に合わせて、ボールを贈呈。引き続き、「応援の輪の拡大」に向けて、取り組んでいく。

## 所属パラリンピアンに対する応援活動が 社内にポジティブな変化をもたらす

2013年にパラ・パワーリフティングの西崎哲男選手を雇用した乃村工藝社。最初は小さかった応援の輪を、体験会などを通じて徐々に広げ、西崎選手のリオ大会出場を機に全社的なものへと拡大。西崎選手がもたらしたインパクトは大きく、社内一体感や帰属意識の醸成、多様性の理解の促進はもちろん、事業である空間プロデュースへのヒントにもつながっている。



### 株式会社乃村工藝社



観戦会



体験会・講習会



協賛



アスリート雇用

#### 企業情報

株式会社乃村工藝社

【担当部署】東京2020オリンピック・パラリンピック推進室

【所属人数】21名

【住所】東京都港区台場二丁目3-4

【電話】050-5962-1171(代表)

【URL】<https://www.nomurakougei.co.jp/tokyo2020>



がらなかった。

そこで、西崎選手応援の機運を盛り上げようと、社内イベントを開催。西崎選手とともに、他の階級の選手も招き、同社の役員と社員、そして招待者合わせて、120名を前にデモンストレーションを実施。さらに、競技体験も行った。



西崎選手

その甲斐あって、入社2年後に行われた全日本パラ・パワーリフティング選手権大会には、社員とその家族74名が応援に駆け付け、西崎選手も自己記録を更新。その後、西崎選手は日本代表の座を勝ち取り、リオ大会出場を果たした。これを機に、全社的な盛り上がりへと発展した。

#### 所属パラリンピアン活躍で生まれた変化

西崎選手のその後の活躍は、同社に一体感を生むとともに、ポジティブな変化ももたらした。西崎選手を通して、NPO法人日本パラ・パワーリフティング連盟とのつながりができた同社は、2016年全日本パラ・パワーリフティング大会で競技会場の空間づくりを手掛けた。



※第16回全日本パラ・パワーリフティング選手権大会 (2016年1月10日 日本体育大学 世田谷キャンパス 記念講堂)

パラ・パワーリフティング大会のサポートを通して、障がいのある人の行動や心理面にまで配慮した空間づくりの意識改革のきっかけとなった。それを東京2020大会の空間づくりにもつなげていこうと考えている。

西崎選手は、競技だけでなく、車いすユーザーであることを活かして業務面でも活躍している。本人も手ごたえを感じていたようだ。

仕事を通じて西崎選手と直接、接する社員が増えていることもあり、社員の意識も確実に変化している。

1892年の創業以来、その高い専門性と挑戦力で時代を切り拓いてきた同社。仕事においてプロフェッショナルであることは当然。加えて、携わるイベントや空間への参加意識を持つこと、つまりマインドも大切にしている。その点、西崎選手への支援・応援や東京2020オフィシャルサポーターであることを通じて、東京2020大会への参加意識、貢献意識はすでに高まっている。さらに同社では多様性や共生社会への理解も着実に進みつつある。こうした変化が同社のさらなる成長と発展につながるのには間違いなさそうである。



パワーリフティング部のキャプテンも務める遠山氏

#### コロナ禍における取組・今後の方向性

社内で実感したスポーツの力を社外にも広げ、パラスポーツや共生社会への拡がりに貢献する社会活動をはじめている。西崎選手は社員とともに「心のバリアフリー」をテーマに全国の教育機関など20か所以上で講演や体験会を行い子供への原体験づくりに取り組んでいる。コロナ禍でも「スポーツの感動」を通じて人びとを応援し笑顔にできる活動を、アスリートと企業・地域が一体となって続けていければと考えている。

※西崎選手は「あすチャレ！メッセンジャー GOLD」認定講師として活動しています。講演会へのご依頼は下記をご覧ください。  
<https://www.nomurakougei.co.jp/tokyo2020/athlete/>

#### 東京2020大会を、企業と社員の成長のきっかけに



主催したイベントの様子

同社は、東京2020大会を盛り上げようとさまざまなプロジェクトをスタートした。その一つに、社内外向けイベント「ツナギングプロジェクト」を開催。大会に向けた機運醸成をねらい、社員による人文字などで構成する映像「ツナギングハート」を制作し、社屋のエントランスに設置したモニターで随時、放映している。(2019年12月取材時)

「このプロジェクトは、東京2020大会に向けてみんなで盛り上げるために、社内外に横ぐしを通すといったイメージです。空間プロデュース業界のリーダーとして先頭に立って盛り上げに貢献するとともに、当社としても、これをきっかけにあらゆるところとのつながりを強化して総合力を高め、企業としてもう一段階上のステージに行きたいと考えています。」と、第一事業本部の遠山潔氏は説明する。また、一人でも多くの社員に東京2020大会を自分ごと化してもらおうと、社内向けイベントも開催。トップアスリートを迎えてのトークセッションやボッチャ体験会、パワーリフティング部による同競技の体験会などを実施してきた。

#### 所属パラリンピアンへの応援の機運を 盛り上げるために

2年後のリオ大会出場に向けて、パラ・パワーリフティングの西崎哲男選手(男子49kg級)を応援しようとの動きが出始めた。しかし、それはごく一部の社員のみで、全社一丸となって応援しようとの機運はなかなか盛り上

# シッティングバレーボールとボッチャで 社内のD&Iとコミュニケーションの 活性化を推進

東京2020大会ゴールドパートナーの野村ホールディングス。日本パラバレーボール協会のスペシャルトップパートナーとなったことを機に、パラスポーツの観戦や体験会を通じ、社内でダイバーシティ&インクルージョン(D&I)の理解と普及を進めている。すでに東京2020大会後を見据え、D&Iを通じた豊かな社会の実現に向けて、この活動を一過性ではなく末永く続けるための体制を整えている。



## 野村ホールディングス株式会社



観戦会



体験会・講習会



ボランティア



協賛

### 企業情報

#### 野村ホールディングス株式会社

【担当部署】東京2020オリンピック・パラリンピック推進室  
【所属人数】9名  
【担当部署】コーポレート・シティズンシップ推進室  
【所属人数】13名  
【住所】東京都千代田区大手町二丁目1-1  
【電話】03-3278-0725(代表)  
【URL】<https://www.nomuraholdings.com/jp/tokyo2020/>



“一生涯”スポーツのサポートを通じて、  
社内のD&Iも推進



シッティングバレーボール社内体験会

社内にシッティングバレーボールの日本代表選手(当時)が在籍していたことを機に日本パラバレーボール協会にヒアリングを実施。その際、代表理事から「シッティングバレーボールは、障がいの有無も性別も年齢も関係なく楽しめるスポーツであり、その意味では“障がい者”スポーツというより“一生涯”スポーツである。」との

説明を受け、これは同社が経営戦略の一つとして掲げているD&Iの推進の考えとも重なると考え、支援を決めた。競技の社内浸透を促すため、役員シッティングバレーボール体験会を行い、その様子を社内に発信。その後、社員の体験会参加や選手権出場を通して、「ルール次第で障がいの有無は関係なくなり、障がいは、障がい者自身ではなく取り巻く環境を作る」ことを実感し、障がいやパラスポーツを自分ゴト化してもらう良い機会となっている。

### 社内コミュニケーションのツールとして 広まったボッチャ

2017年夏に開催された企業対抗ボッチャ大会「Office de Boccia」(オリンピック・パラリンピック等経済界協議会主催)に、チーム「NOMURA」を結成し、参加したことをきっかけに、社内でも役員による体験会を実施。その後、社員向けの体験会も開催された。同社でボッチャが親しまれているのは、競技への理解が進み、その楽しさが伝わっていることもある。

また、社内コミュニケーションのあり方が従来と大きく変わってきている中で、上司と部下がコミュニケーションをとるツールとして、終業後に手軽に楽しめるボッチャにスポットライトが当たっている。



ボッチャを社内コミュニケーションツールとして活用

### 地道な活動が現在の盛り上がりにつながっている



東京2020大会に向けた応援イベント

シッティングバレーボールをD&Iの促進へ、ボッチャを社内コミュニケーションの活性化へとつなげている同社は、さらにこれらを社外へ展開していく。2018年4月にバレーボール女子日本代表チームのオフィシャルスポンサーとなったことを機に、多様なバックグラウンドを持つ人たちが一つのボールをつなぐ「バレーボール」という競技を通じてD&Iを推進し、豊かな社会の実現を応援する「Ball for All」プロジェクトを始動。また、社内でのボッチャ体験会だけでなく、2019年6月ごろから他企業ともボッチャ対抗戦を実施しており、社内外

のコミュニケーションが深まるきっかけに繋がっている。全国の支店で東京2020大会に向けた応援イベントも開催。近隣の商業施設や駐車場などの空きスペースを利用し、東京2020マスコットによる演出やオリンピック・パラリンピアン講演会とともに、ボッチャ体験会を実施している。このイベントは子どもを中心とした家族連れを対象としており、普段あまり接することの多くない地域の方々に同社を知ってもらう良い機会にもなっている。さらに、お客様向けセミナーや小・中学生向けの金融・経済教育を行う際も、会場にボッチャコート併設して体験の機会を提供し、イントラネットを通じて社内に発信。その成果を知った全国の支店から開催希望が届くようになった。

こうした取組は決して一過性のものではないと同社コーポレート・シティズンシップ推進室(当時、現・ESG推進室)園部晶子室長は力強く語る。



園部室長

「東京2020大会が閉幕しても、私たちはこの盛り up を継続させたいと思っています。パラスポーツと一緒に育てていきたい、そしてより豊かな社会の実現につなげていきたいと強い想いで関わっています。」(園部室長)

※本文については、2020年1月時点のものです。

### コロナ禍における取組・今後の方向性

今後も様々なパラスポーツ競技を観戦・体験する機会を増やしていくことにより、障がい者や社会的弱者への理解と支援につなげていく。引き続きパラスポーツの普及活動に尽力していく。また、コロナ禍において、パラスポーツの体験会の実施や観戦が困難な中、ポスター制作等による社内外への啓蒙活動を重点的に実施。今後、パラスポーツ大会の様子がテレビや動画配信ツールによって公開される場合は、役員員に対して積極的な観戦を促していく。

# 車いすテニスなどパラスポーツを通じた障がい者の社会参加のきっかけづくりにも力を入れて子どもへの情報発信にも力を入れる

オリンピック・パラリンピックのワールドワイドパートナー、ブリヂストン。従業員応援団による社員として所属するトップアスリートの応援活動を展開。また、障がい者の社会参加のきっかけとなることを目指した未経験者・初心者向け車いすテニス体験会や、子どもたちにパラスポーツの魅力伝える活動にも力を入れている。



## 株式会社ブリヂストン



### 企業情報

#### 株式会社ブリヂストン

【担当部署】オリンピック・パラリンピック室  
 【所属人数】37名  
 【担当部署】AHL企画推進部  
 【所属人数】17名  
 【住所】東京都中央区京橋3-1-1  
 【電話】03-6836-3001(代表)  
 【URL】https://www.bridgestone.co.jp/



### 試行錯誤を繰り返しながら、応援団への参加者を増やす



小林選手を応援する社員の皆さん

「ゴールドパートナーとなった当初は、何から始めていいか分からなかったが、まずは、当社社員の車いすバドミントン選手、小林幸平選手の応援からスタートした。」(オリンピック・パラリンピック室アクティベーション推進部の齋藤景介氏)

次に、夢に向かって挑戦するすべての人を応援する

「TEAM BRIDGESTONE」を発足。社内外のトップアスリートたちと契約し、彼らが出場する大会での応援活動にも取り組み始めた。対象の大会ごとにイントラネットで参加者を募り、従業員応援団を組成しようとした。ところが、競技や大会によって、参加人数に大きな差が生じてしまったのである。

そこで、Tシャツやスティックバルーンといったオリジナルの応援グッズを作り、参加者に配布したところ、応援団に一体感が生まれ、参加人数が増えたのである。また、もっと社内の隅々にまで情報を浸透させたいと、2019年度より各部門や事業所におけるオリンピック・パラリンピックのコミュニケーションの中核となる従業員アンバサダー制度もスタートした。

### 障がい者への思いを込めた車いすテニス体験会

サポート活動の一環として、東京・小平の同社のテニスコートで、人工芝から車いすテニスもできるハードコートに改装した。加えて雨天でも練習できるようにと、屋

根付きコートを新設した。小平のコートでは、未経験者・初心者向けの車いすテニス体験会を開催している。



(左)久富氏 (右)齋藤氏

「障がいのある方の中には、自宅に引きこもりがちの方がたくさんいらっしゃると思っています。そうした方たちが外出しているいる方と交流し、社会に踏み出すきっかけになればと考えています。」と語るAHL企画推進部の久富 龍次郎さん。

参加者募集にあたっては、久富氏が開催地周辺の病院や福祉施設などを一軒一軒訪ね、写真を見せながら体験会の趣旨を説明したり、チラシを配布したりしている。そうした活動が実を結び、毎回、定員いっぱいの参加者が集まっている。

車いすテニス体験会の前日には、同社従業員でパラバドミントンの選手を講師に迎えてマナー研修を行い、車いすユーザーとの接し方を学んでいる。多様性を理解し、社会貢献意識を養う貴重な機会となっている。



車いすテニス体験会の様子

### パラスポーツの盛り上げに必要なこと

「選手の背景にあるストーリーを知ること、会場で生観戦すること、体験すること」を繰り返すことで、パラスポー

ツの醍醐味やパラアスリートのすごさが理解できるようになり、結果、パラスポーツの盛り上げにつながっていくのではないかと、齋藤氏は分析する。

同社では、本番に向けてパラスポーツの盛り上げを加速させようと、今後は小中学生に向けた情報発信にも力を入れていく方針である。

「まずは子どもたちにその魅力を伝えることが重要だと分かりました。パラスポーツやパラアスリートを知った子どもたちは、親にその魅力を伝え、試合を観に行こうと誘う、いわゆるリバースエデュケーションが起こるからです。全国で展開中のお子さん向けスポーツイベント『ブリヂストン×オリンピック×パラリンピック×GO GO!』でも、その効果を期待して、今年からオリンピックとパラリンピックが半分ずつになるよう内容を構成し直して実施しています。」(齋藤氏)



社員もボランティアとして参加

ワールドワイドパートナーとしての役割を果たすべく、真摯な研究と丁寧かつ地道な取り組みを積み重ねながら、独自の道を切り拓いている同社。その活動は、2020年とその先の日本と世界を明るく照らすものとなるに違いない。

※本文については、2019年10月時点のものです。

### コロナ禍における取組・今後の方向性

当社は、企業理念の使命である「最高の品質で社会に貢献」を実現するために、指針として“Our Way to Serve”を掲げている。パラスポーツのサポートは、その取り組むべき重点領域の1つ「People(一人ひとりの生活)」に結びつく活動である。ワールドワイドパラリンピックパートナーとして、社内外の様々な活動を通して引き続きパラリンピックをサポートしていくとともに、パラ競技やパラアスリートの支援を継続する。

# アスリートと共に働き、日常的な交流をもつことが 深い理解と親近感につながり、 応援にも自然と力が入る

障がい者の雇用・職場定着支援とスポーツ振興に力を入れる三井住友海上火災保険株式会社。2015年からはパラアスリートも採用。長年培ってきたノウハウをベースに、社員が自然とパラアスリートを応援したくなる、そして選手も安心して競技に打ち込める環境づくりを目指している。



## 三井住友海上火災保険株式会社

三井住友海上  
MS&AD INSURANCE GROUP

### アスリートとしても、社会人としても 一流であってほしい



「チームWITH」の集まり

同社は、数々の世界で活躍するアスリートを輩出している企業スポーツの名門。1987年、障がい者職場定着推進チーム「チームWITH」を発足させ、以来、障がい者雇用促進のための受け入れ態勢づくり、職場定着のための職場環境づくりに力を入れてきた。

2015年にパラアスリートを採用し、現在は計5名が在籍している。

「アスリートは引退後の人生の方が長い。それゆえ、一

流のアスリートであると同時に一流の社会人でもあってほしい。」との思いから、アスリートは全員、正社員として雇用し、各職場に配属。就業時間や日数は柔軟に決めており、競技団体などから派遣依頼を受けての大会や合宿への参加は業務扱いとしている。と同時に、他の社員同様、しっかりと仕事も割り振られている。例えば、米岡聡氏は、視覚障がい者であり、パラトライアスロンとブラインドマラソンの2種目で強化指定を受けているトップ選手である。国内外での合宿や遠征に参加する機会も多く、月の大半出社できないこともある。それゆえ、会社側もしっかりとフォロー体制を築いてくれている。不在期間中の仕事は、米岡選手がチームのメンバーと調整している。これは社会人として必要なスキルでもある。

“日本一、世界一”の応援団がかけつけるのは、  
同じ企業で働く仲間だから

同社には、同社社員や代理店などで構成するスポーツ後援会「ガッテンダース」(会員数約6000人)があり、



観戦会



体験会・講習会



ボランティア



協賛



アスリート雇用

### 企業情報

三井住友海上火災保険株式会社

【担当部署】人事部

【所属人数】4名

【住所】東京都千代田区神田駿河台3-9

【電話】03-3259-3111(代表)

【URL】<http://www.ms-ins.com/>



会員を中心に、多くの社員が応援に駆け付ける。「私たちは日本一、世界一の応援団だと自負しています。」と胸を張る同社人事部の杉山仁スポーツ振興チーム長。



(左)杉山スポーツ振興チーム長  
(右)米岡選手(パラトライアスロン・ブラインドマラソン)

「気配で応援団がいることに気づくこともあります。それほど、当社の応援団は存在感がすごい。もう、玄人ですよ(笑)。本当に応援がほしい場所に来てくれるので、そこで『米岡っ』と名前を呼ばれたりすると、自分にムチを入れてもうひと踏ん張りできるんです。本当に心強いです。」(米岡選手)

「競技では負けることもあれば、ときには、出場すらかなわないこともあります。しかし、アスリートはどんなに悔しい思いをしてもまた立ち上がり、次のレースに向けて準備に入ります。そんな姿を間近で見たら、応援せずにはいられないし、それこそがアスリートを雇用する意義です。」と杉山チーム長は、強調する。



応援に駆け付けた社員の皆さん

また、その結果に関わらず、大会後、選手は必ず応援団の元を訪れてあいさつし、一緒に写真撮影をしたりして交流を図る。これも大切なポイントである。

そうした体験をすることで、自然と「また応援に行きたい」と思う社員が増え、さらに、同僚や家族、友人に「行ってみるといいよ」と声をかけたり誘い合ったりするようになる。こうして応援の輪が徐々に広がっていく。

### パラスポーツ振興の肝は地道にコツコツ

パラスポーツは同社にとっては歴史が浅く新しい競技。そのため、もっと周知が必要である。しかし、爆発的に応援者を増やす策はない。

スポーツは盛り上がる時も、そうでないときもある。そもそも、それなりの結果が出るまでには時間がかかるものである。だからこそ、イントラネットや社内報、社内衛星放送、スポーツ後援会「ガッテンダース」会員専用HPなどを通じて、コツコツと情報を流し続けるなど地道な取り組みを行って、パラスポーツの応援も企業文化として根付かせていくことが大切だと考えている。

「パラアスリートは障がいの種類も程度も、また競技レベルも一人ひとり異なり、当然、その悩みも必要な支援も違います。社員として身近に接することで、そうしたパラアスリートやパラスポーツへの理解が深まり、自然と応援する気持ちが生まれ、輪も広がっていくのではないのでしょうか。大きなことをする必要はないと思います。私たちもパラスポーツ振興に関してはまだ道半ばなので、これからも、できることから取り組んでいきます。」(杉山チーム長)

### コロナ禍における取組・今後の方向性

パラアスリートのみではなく、当社所属の他部の選手とも協力し、講演活動をはじめとした「人々の幸せを支える」ためのサステナビリティ活動を今後も行っていく予定である。また、そのような活動内容を、各種媒体を通して発信していくことで、パラスポーツへの理解促進や競技の認知度の向上にもつなげていく。

# パラスポーツで企業を変えたいなら、 応援の一步先へ。 五感を使った活動で、社員と企業の変革を促す

障がいのある人とない人が共に働く共生企業として、先進的な取り組みを行う三菱商事太陽。三菱商事とタッグを組み、パラスポーツとパラアスリートを支えるボランティア活動に汗を流すとともに、社内活動にもボランティアを受け入れることで、共生企業・共生社会の実現に必要な意識改革へとつなげる挑戦を続けている。



三菱商事太陽株式会社



観戦会



体験会・講習会



ボランティア



協賛

## 企業情報

### 三菱商事太陽株式会社

【担当部署】総務・管理部 業務チーム

【所属人数】6名

●別府本社

【住所】大分県別府市内籠1399番1

【電話】0977-67-3214(代表)

●東京事務所

【住所】東京都千代田区丸の内2-2-3

丸の内仲通りビル9階

【電話】03-6212-5215(代表)

●北海道事務所

【住所】北海道岩見沢市志文町309番地9

(社福)クビド・フェア内

【電話】0126-33-7001

【URL】<https://www.mctaiyo.co.jp/>



“多様な仲間を受け入れて、共に働く”ために



福元代表取締役社長

同社は、三菱商事と、社会福祉法人太陽の家との共同出資会社であり、三菱商事の特例子会社である。太陽の家は、1964年の東京パラリンピック実現に尽力した、故・中村裕博士が創設。その太陽の家と、故・中村博士の理念に共感した三菱商事が手を取り合い、1983年、IT企業として同社を創立。以来、障がいのある人とない人が

共に働く共生企業として新たな道を切り開いてきた。「多様な仲間を受け入れて、共に働き、社会や会社を変えていく。これを実現するためには、従来の企業の採用方針や評価制度、人材育成方針を変革し、労働環境を整えることが不可欠です。そのためには、まず経営層を含む社員の意識改革が必要です。」(福元邦雄代表取締役社長)



社員がボランティアとして参加

「意識改革の手段としてパラスポーツに関わることは有効。パラアスリートたちの、いわばハレとケのギャップは、現場に足を運び、においをかいだり振動を感じたりと五感をフル活用することで初めてわかるもの。まずは現

場に足を運んでもらいたい、そして、「ボランティア」をぜひ行ってほしい。」と、福元社長は言う。

## 共に汗を流し、楽しむ時間と空間が 社員の意識を変える

同社は、「大分国際車いすマラソン」で、ボランティアとして受付や交通整理などの運営を担っている。その際、三菱商事の若手社員もパラスポーツ支援活動『DREAM AS ONE.』の一環として参加。

また、同社の社員旅行の際にも、障がいのある社員の介助役として三菱商事の若手社員が参加している。

同社の社員全員が楽しめるようにとの配慮からスタートした取り組みで、基本的な介助の知識を伝えただけで、実際に一緒に外出し、共に楽しみながら食事やレクリエーションのサポートを行う。



介助の仕方を学ぶ社員の皆さん

障がいのあるなしに関わらず、誰だって遊びたいし、食事やお酒も楽しみたい。体のどこかに不自由があれば、誰かがサポートすればいいだけだと、実感する。障がいのある人たちと時間と空間をできるだけ多く共有することで、社員の意識変革が期待できる。三菱商事独自のボランティア活動で、三菱商事が後援する車いすラグビーの試合後に、激しく汚れた床をゴシゴシと磨いて原状復帰に努めている。地道で根気が必要な作業だが、パラスポーツをする人を増やし、長く続けてもらうためにも不可欠な活動である。

## 企業の経営層こそ、ボランティアを 通じた意識改革を

同社取締役の車いすアスリート・佐藤隆信氏は、『DREAM AS ONE.』の立ち上げ当初から関わっていて、機会があ

ればイベントに参加したり、競技にまつわる話をしたりしてきたが、年を追うごとに、東京マラソンのボランティアに積極的に参加したり、パラスポーツ観戦に行く社員が増えていて、明らかに関心が高まっている、と語る。



社員でパラスポーツを観戦

三菱商事グループは障害のある人の雇用を特例子会社任せにせず、本社などでも障がいのある人の雇用を進めており、本人次第で同社でも本社でも働けるチャンスがあるという。

企業の社内制度改革をスピーディに行うためには、経営トップ層の意識改革も急がれる。その点でも、三菱商事グループでは、幹部クラスのボランティア活動の機会を増やすといった取り組みを進めている。



「大分国際車いすマラソン大会」での佐藤選手

## コロナ禍における取組・今後の方向性

三菱商事(株)がパラスポーツ支援活動として行っている「DREAM AS ONE」と当社が参加している大分国際車いすマラソン大会の運営ボランティアの参加規模の拡大や地元有志が設立した、パラスポーツを通じて障がいのある人とない人が交流し、インクルーシブな社会の実現を目指し活動する「ソイスポ」(Social Inclusive Sports Project)への支援や協賛を今後も行っていく。

## TEAM BEYONDのメンバーになると

パラスポーツ情報満載のメールマガジンが届きます。  
パラスポーツの大会や、イベント等の情報を発信します。

さらに!!

特典  
1

企業・団体のロゴやメッセージが  
TEAM BEYOND公式  
ウェブページに掲載されます。



特典  
2

TEAM BEYONDロゴの使用

TEAM BEYONDバナーロゴを  
企業HP(相互リンク)や名刺に印刷して  
使用することができます。



特典  
3

各種パラスポーツイベントの  
告知サポート

TEAM BEYONDメンバーになると企業で実施する  
障害者スポーツ関連のイベントについて、TEAM BEYONDの  
ウェブページ等で告知することができます。



公益社団法人 東京都障害者スポーツ協会 障害者スポーツに関する支援や事業の実施をご検討されている企業・団体の方は(公社)東京都障害者スポーツ協会の障害者スポーツコンシェルジュに相談することができます。

障害者スポーツコンシェルジュ専用電話  
受付時間 平日10:00-17:00(12:00-13:00を除く)

TEL:03-6265-6123

※メールによるお問合せは同協会HPお問合せフォームよりお送りください。

<https://tsad-portal.com/tsad/contact>

公益社団法人東京都障害者スポーツ協会 〒162-0823 新宿区神楽河岸1-1セントラルプラザ12階



## TEAM BEYONDのメンバーになるには

まずは、ご担当者の方の個人メンバー登録を行ってください。

メールアドレス登録またはソーシャルログインで **簡単3STEP登録**

STEP.1



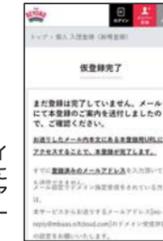
TEAM BEYOND  
公式ウェブサイトの  
「メンバー登録」  
をクリック

STEP.2



利用規約とプライ  
バシーポリシーに  
同意し、メールア  
ドレスとパスワードを送信

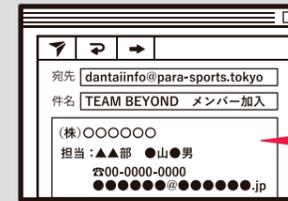
STEP.3



送られてきたメール  
から本登録ページに  
アクセスし、登録完了  
※Facebookか  
Twitterのアカウント  
認証でも登録可能

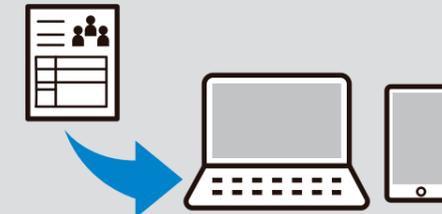
個人メンバー登録後、以下の企業・団体メンバー入会フローをご確認ください。

### 企業・団体メンバー入会フロー



企業名、  
ご担当者様の  
連絡先を送付!

1 TEAM BEYOND企業・団体窓口  
([dantaiinfo@para-sports.tokyo](mailto:dantaiinfo@para-sports.tokyo))へ  
メールを送付してください



2 企業・団体メンバー登録のフォームが届きます



3 必要事項を記載の上、ご提出ください

審査

登録完了!

※ご担当者の方の個人メンバー登録と、③のフォームのご提出をもって団体登録となります。  
※ご登録をいただいたアドレス宛てに、月2回程度配信するメールマガジンの内容を、社内・  
団体内にご周知ください。

### 「TEAM BEYOND」トップページはこちらから

その他、企業・団体様の取組事例やTEAM  
BEYONDの活動内容など随時情報を更新  
しております。是非ご覧ください。

チームビヨンド

検索

<https://www.para-sports.tokyo/>





東京都

## 企業・団体によるパラスポーツ振興の取組事例集

---

令和3年2月発行 印刷物番号 (2)63

編集・発行：東京都オリンピック・パラリンピック準備局  
パラリンピック部調整課

〒163-8001

東京都新宿区西新宿二丁目8番1号

TEL 03-5388-2882

FAX 03-5388-1229

印 刷：株式会社ステージ